VIEW21

2010 September 9月

高校版 Volume 3

CONTENTS

2 私を育てたあの時代、あの出会い

生徒の信頼を受けとめる「覚悟」を学んだ
石川県立内灘高校◎富井康博

4 特集

行事を通して「自立心」を高める

6 課題整理 集団の中で自信を付けさせる場が必要

7 学校事例❶ 宮崎県立宮崎大宮高校
生徒主体の行事が自主自律の精神と人間性を育む

10 学校事例❷ 茨城県立多賀高校
行事の時期を見直して学校生活にリズムを作り生徒の自立心を育てる

13 学校事例❸ 広島県福山市立福山中学校・高校
中高一貫ならではの行事で学校への帰属意識とクラスの結束力を高める

16 指導変革の軌跡

16 島根県立益田高校
導入期指導◎導入期指導の徹底と地域との連携を通して未来を切り開く力を育てる

20 宮城県・私立聖ウルスラ学院英智高校
自立学習支援◎学習と部活動の両立をコースぐるみで支え自ら考え動く生徒を育てる

24 埼玉県立上尾鷹の台高校
小・中学校の「学び直し」◎「学び直し」と手厚い不登校支援で生徒の可能性を広げる

28 生きたデータの徹底活用

2年生夏休み後の切り替えと秋からの進路意識の醸成

32 未来をつくる大学の研究室

障がいや病気を持つ人々にとって生きやすい社会の仕組みを追究
立命館大大学院 先端総合学術研究科 生存学研究センター

36 30代教師の「転んでも起きる!」

「授業で子ども扱いされている」生徒の言葉から自立性に訴える授業に挑む
東京都立八王子東高校◎石崎陽一

38 新課程への助走

中高一貫校から見る中高接続の重要性と課題—新課程を契機とした指導の模索—

42 大学選択 新たな視点

学生が主体的に学び問題解決までを行う体験型授業

48 VIEW'S SQUARE

本文中のプロフィールは
すべて取材時のものです。
本文中、敬称略。
本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製および転載を禁じます。

http://benesse.jp/berd/ 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

21年前、初任で赴いた石川県立大聖寺高校は、加賀の美しく、小さな町並みの中に溶け込むように存在する学校でした。生徒たちは、学校をもう一つの我が家のように愛し、教師も家族のように生徒を受けとめていました。

赴任早々、ある日曜の朝、用事があって私が学校に行くと、無人のはずの教室に人の気配がします。見ると、数人の生徒が勉強をしていました。「家では落ち着いて勉強できないから学校にきた」と言うのです。大阪の都市部の高校を卒業した私には、休日、制服姿で学校に勉強に行く感覚が分かりませんでしたから、「この子たちは学校が好きなんやな」と感心したものです。「先生なら何でも分かるはず」と生徒が信じていることも驚きでした。「教えてください」と漸化式の難問を持ってきた時は、「地歴が専門の僕になぜ?」と戸惑いながらも、参考書を片手に懸命に解きました。

それまで私がイメージしていた高校教師は、空き時間は専門教科の知識を深めて、時に学会

私を育てた
あの時代、あの出会い

今、振り返る教師としての原点

生徒の信頼を受けとめる「覚悟」を学んだ

石川県立内灘高校 富井康博 TOMII YASUHIRO

生徒にとって、教師は最も身近な大人である。迷った時に歩むべき道を示し、また疲れたときには甘えることを許し、心を休ませてくれる存在でもある。若き時代、学校に寄せる生徒の期待の大きさと、それに向き合うことの責任の重さに気がついた石川県立内灘高校の富井康博先生。20年後も変わらない「教師としての覚悟」への気づきを語る。

右 とみい・やすひろ　地歴・公民科。大聖寺高校で11年間勤務した後、加賀高校へ。9年間の勤務を経て、2010年度より内灘高校の教壇に立つ。

左 いばやし・ながゆき　地歴・公民科。公立中学校教諭、石川県立図書館古文書課などを経て、大聖寺高校へ。同校で10年間勤務。その後、小松瀬領養護学校（現在、小松瀬領特別支援学校）校長などを経て、07年度、加賀高校校長。同年度3月退職。現在は、石川県金沢港大野からくり記念館館長。

先輩教師の言葉

時代や地域が変わっても本質は変わらない

元・石川県立加賀高校校長
IBAYASHI NAGAYUKI 伊林永幸

当時の大聖寺高校は、地域の人々にとって文化の発信地であり、一種のたまり場でした。私はたまたま学校の近所に住んでいたのですが、正月の三が日、「学校を開けてください」と生徒数人が家を訪ねてきました。「いったい何をするつもりか」と聞くと、「勉強する」と言うのです。「ほかの生徒にも声を掛けてしまっているから、ぜひ開けてほしい」と頼んでくるのです。また、普段から進路指導室は生徒の学習室のようになっていました。いつまでも生徒が帰らないものだから、進路課の教師も全員彼らに付き合って毎日残っていました。今では考えにくいことかもしれませんが、それだけ学校が頼りにされた地域であり、時代だったのです。富井先生にもずいぶん無理をさせました。

で発表をする、そんな職業でした。しかし現実の自分は、額に汗して生徒と掃除をしながら、日々の出来事から将来の夢までを語り合っている。だから、軽い気持ちで、同じ地歴科の伊林永幸先生に、「高校生ってもっと手のかからないものだと思っていました」と言ったのです。それに対し、普段温厚な伊林先生は、意外なほど厳しい口調で私にこう言いました。「生徒、保護者、地域の要望に全力でこたえるのが地方公立高校の教師の役目だ。学会で発表するような知識よりも、今のキミには大切なものがある」。学校を心の底から信頼している生徒のすべてを受けとめる……伊林先生の覚悟に私は気がつきました。

実際、伊林先生は生徒のすべてをよく把握していました。「あの子はきょうだいが多いから、私立への進学は難しいはずだ」「今、お父さんが病気で入院しているから、面談できめ細かくケアする必要がある」など、生徒の情報が見事に頭に入っていました。当初、私は「生徒とはいえ、他人の財布の心配までするのは行き過ぎではないか」と感じていました。そんな私の思いを察知してか、伊林先生は私にこう言ったものです。「これが現実なんだよ」と。

撮影◎石川県立内灘高校にて

進路課長だった伊林先生のもとには、生徒がよく相談に訪れました。同じような志望、成績なのに、ある生徒にはA大学を強く勧め、別の生徒には「A大学はキミには合わない」と断言する。保護者の考えや経済状況、そして生徒の気質を踏まえて、指導を大きく変える姿を、私は何度も目撃しました。

赴任2年目に進路課に配属され、私は更に多くを学ぶことになりました。センター試験後に行われる出願検討の判定会議で、3年生にかかわるすべての教師が、300人を超える生徒の出願先と個別学力検査までの指導内容を、丸2日間会議室に缶詰になって話し合う様子を見て、ここまでやるのかと驚きました。一人ひとりの生徒のために教師が一丸となるその様子は、若く、経験の乏しい私には感動的ですらありました。特に3年生に何か変化があれば、担任はすぐに進路課に知らせることになっていました。進路課は早急に面談を行い、その内容を担任に報告します。指導のブレを未然に防ぐためです。進路課としてリーダーシップを発揮しながらも、「最も生徒のことを考えている担任を立てることが、生徒の進路実現のカギだ」と伊林先生がいつも話していたことを今もよく覚えています。

私にとって、伊林先生の言葉はまさに財産です。先生から聞いた言葉で、今私なりに焼き直して言っていることが数多くあります。「担任との信頼関係」もそうです。後年、進路課長になった時、私は「進路実現のための十箇条」と題したプリントを作りました。ただし、そこには九つしか書きません。最後の一つはより印象に残るように、「よく聞いてくださいね。それは『担任との信頼関係』なんです」とわざと口頭で言いました。いい言葉、熱い思いは何年経っても古くなりません。

私は伊林先生に、教師という仕事の要諦を教えていただきました。伊林先生に出会えなかったら、掃除時間中に専門教科の研究ばかりして、生徒のことを知る貴重な機会に気がつかなかったかもしれません。

今の勤務校の内灘高校には、今年赴任したばかりです。伊林先生が大聖寺高校でそうであったように、生徒のすべてを受けとめ、地域の人々が「我が子を内灘高校に入れたい」と思ってくれるよう頑張るつもりです。

社会状況が変わった現在、学校に頼らなくても受験に関する情報を得られるようになり、進路観や労働観の変化から進学先に対するこだわりもずいぶん薄れてきました。保護者の意識、教師との関係も変わりました。ただ、それでも、その地域で学校がどんな役割を担っているかを教師はとことん考えなければいけないと私は思います。

教師を取り巻く環境も変わりました。富井先生と一緒に働いていた頃は、それこそ夜遅くまで学校にいることが可能でしたが、今はそれも難しい。生徒が勉強したいと言っても、定時にきちんと下校させなければいけません。時代とともにいろいろなものが変わりました。しかし、生徒一人ひとりと向き合うことの大切さは、いつの時代でも、どんな地域でも変わりません。富井先生は、それをよく分かってくれていると改めて思いました。

生徒に愚直に向き合い続ければ、生徒はいつかきっと教師の方を向いてくれます。20年前に比べれば、時間はかかったとしてもです。だから、若い先生方には時代や社会制度のせいにして、諦めたりしないでほしいのです。真摯なその指導は、いつの日か必ず実を結びますから。

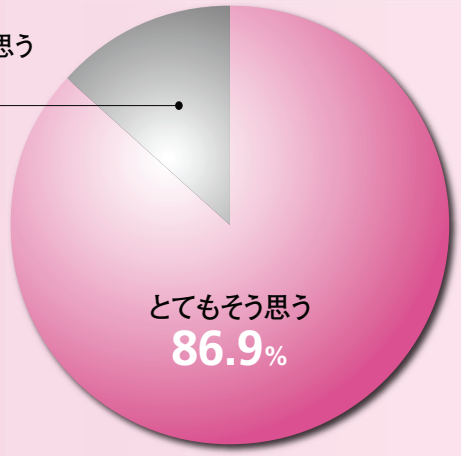
SPECIAL ISSUE

特集

行事を通して「自立心」を高める

生徒の自立心育成に、学校行事が果たす役割は大きい。
学校行事の価値を見直し、生徒の自立心を高めるために必要なことは何かを考える。

Q.行事は生徒の自立心を高めるために活用すべきですか



『VIEW21』高校版モニターアンケート結果より

８割以上の教師が、
「**行事は生徒の自立心を高めるために活用すべきだ**」と考えている。

1 自立にかかわる生徒の実態

【P.6 課題整理】

- 自信を持ちにくい傾向
- 居心地の良い対人関係を保持する傾向は強い
- 他者や社会のために役立ちたいという意識が弱い

2 行事の価値とは何か
――「自立心を高める」という観点から整理

【P.6 読者の声、P.7～15 学校事例】

- 他者との交流により、コミュニケーション力が向上する
- 友情や団結が芽生え、帰属意識や結束力が高まる
- 問題解決を通じて自己成長の体験ができ、達成感を得て自信が高まる
- 他者から賞賛を得ることで、自己肯定感が高まる
- 効率的な時間の使い方や段取りを体得できる

3 行事の価値を高める工夫

宮崎県立 宮崎大宮高校
【P.7】

◎年度始めに生徒全員が参加する行事を位置づける
◎学習だけでなく、行事も部活動も一生懸命に取り組む
◎多くの生徒が行事の企画運営にかかわれる役割を用意する

「リーダーでなくても、仲間と衝突することがあるはずです。そうした苦い経験をしているからこそ、リーダーの生徒に尊敬の念を抱きますし、集団としての規律を守るようになるのです」（黒木篤先生）

茨城県立 多賀高校
【P.10】

◎行事で学校生活のリズムをつくる
◎行事の実施時期を3年間の指導体系の中で見直す
◎生徒の自己効力を高めるために手を掛ける
◎運営面で、生徒自身に任せる場面を多くつくる

「自立とは、生徒同士の支え合いの中で、一人ひとりの心が強く育っていくことなのかもしれません」（長山祐司先生）

広島県 福山市立 福山中学校・高校
【P.13】

◎中学・高校の「縦軸」と、中入生・高入生の「横軸」の視点で行事を組み立てる
◎結果だけではなく、過程そのものを評価する
◎決められた枠組みの中で最大限主体性を発揮させる

「生徒が主体的に取り組んでいる姿を見て、勇気を持ってそのまま続行させることに決めました」（土井光憲先生）

課題整理

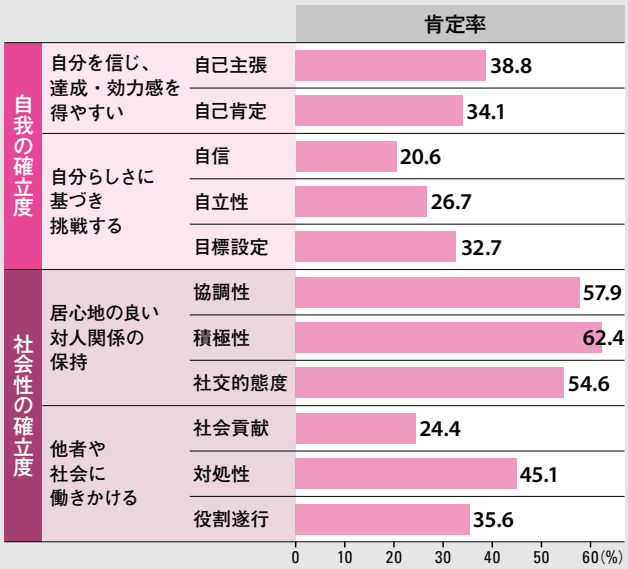
集団の中で自信を付けさせる場が必要

自信を持てない高校生が多い中、自信を持たせ、自立心を育てる行事には、どのようなものがあるのか、読者モニターに聞いた。

弊社の調査によると、今の高校生は「自我の確立度」が「社会性の確立度」に比べて全般的にスコアが低い。自我の確立度の中では「自信」の肯定率が特に低い。社会性の確立度では「協調性」「積極性」の肯定率は比較的高いが、「社会貢献」「役割遂行」の肯定率は低い。周囲と協調する姿勢は見られるが、自分に自信が持てず、他者や社会のために役立ちたいという意識は弱いようだ。

こうした傾向からも、集団の中で自信を付けさせる場を、学校で用意する必要がある。モニターアンケートの回答にもあるが、行事には、生徒が集団での主体的な活動を通して自信を付けられる要素が多く含まれている。行事の狙いや方法を見直し、行事の価値を高めることによって、生徒に自信を付け、自立心を高めることが出来るのではないか。

図　高校生の自我、社会性の確立度



出典／Benesse 教育研究開発センター「高校生の学習行動検証報告」（2007年）

生徒の自立心育成に寄与している行事　＊『VIEW21』高校版モニターアンケートより

◎**応援歌練習**。バンカラ応援で生徒自身（応援団幹部）が全校生徒を動かす。1年生はこの1週間で、厳しさに耐え、学校への帰属意識が高まる。〈岩手県〉

◎**体育大会**。学年横断で団を編成し、3年生が下級生を指導する。生徒同士の人間関係など難しい面もあるが、生徒の成長はとても大きい。〈富山県〉

◎「産業社会と人間」を中心にした科目選択及び**キャリア教育**。社会人講師による授業やガイダンス、大学・企業見学会などを通して社会と通じるので、生徒も成長する。〈愛知県〉

◎**入学時のオリエンテーション合宿**。本校は学園祭や修学旅行、部活動などが盛んで、生徒が自主的に動く土壌はある。2年、3年と学年が上がるごとに、その意識は高くなる。そうした校風にいかに1年生を乗せていくかが大事だ。〈滋賀県〉

◎**学校行事すべて**。行事への積極参加と、受験勉強との両立。1日の時間の使い方を考えて、自分が今何をすべきか考えることが出来る能力を養いたい。当然、行事への完全燃焼は必須。〈京都府〉

◎**文化祭と体育祭**。いかに生徒に自立的に活動させるかを、調整するのが教師の腕の見せ所だと思う。放任では駄目。〈岡山県〉

◎**体育祭**。生徒が運営しており、最後に全校生徒によるダンスがある。これは正式プログラムにはなく、3年生が1、2年生を巻き込み行うプログラム。〈愛媛県〉

◎**予餞会**。教師が卒業式の前日、生徒の前で歌ったり踊ったりコントをしたりする。厳しかった先生の崩れた姿に、生徒は大喜び。そして、これが生徒と教師をつなげる大切な役割をしている。これを経て、生徒は卒業の意味を考える。下級生もそうして卒業する先輩を見て高校生活を大事にしようと思うのではないか。〈青森県〉

◎質問とはややずれるが、最近感じるのは、行事が伝統的に受け継がれているため、生徒は「ソツなく」こなす。その「ソツなさ」が最近気になり、もう一歩突っ込んでも良いのではないかと思う。〈埼玉県〉

学校事例 1

宮崎県立宮崎大宮高校

生徒主体の行事が自主自律の精神と人間性を育む

121年の歴史がある宮崎県立宮崎大宮高校では、多くの行事を、生徒会を中心に生徒自身が運営している。全校生徒が参加する行事も多く、生徒会だけでなく、普通の生徒にとっても成長の場となっている。

生徒が企画・運営し、反省会まで行う

宮崎県の中心部に位置する宮崎県立宮崎大宮高校は、旧制中学を前身とする伝統校で、代々受け継がれている行事が多数ある。そのほとんどは、生徒会を中心に生徒自身の手で運営されている。生徒指導部の高原博先生は、次のように説明する。

「規模が大きな行事は、行事ごとに実行委員を募集し、生徒会役員を取りまとめ役として、企画、準備、渉外、広報、当日の進行など、すべて生徒が行います。該当行事を担当する教師は裏方としてかかわりますが、それ以外は担任でも手を出すことはありません。終了後は、生徒会及び実行委員会で反省会を開き、改善点は次年度への引き継ぎ事項としています。行事はまさに、本校の校是である『自主自律』の実践の場なのです」

同校は、行事を通して生徒にどのような力を付けてほしいと考えているのか。進路指導部長の黒木篤先生は、それを「社会を生きていく力」と語る。

「本校は、県や国、そして世界に出てリーダーとなるような人材の育成を目指しています。そうした人材は、学習だけではなく、行事や部活動を通して育つものと考えます。集団で一つのものを作り上げることは、困難の連続です。意見が対立したり、作業が思うように進まなかったり、不本意でも全体の方針に従わなければならないこともあります。だからこそ、困難を乗り越えて成功した時の充実感は格別であり、それを共有した仲間の大切さを知ることが出来るのです。そうした濃密な人間関係を通して、コミュニケーション能力を身に付け、何があってもやり抜く強い精神力が培われることを目指しています」

学習だけでなく、行事も部活動も一生懸命に取り組む。いろいろなこ

PROFILE

宮崎県立宮崎大宮高校

◎1889年開校の尋常中学校の流れをくむ伝統校。1989年に文科情報科を設置した。大宮精神として「自主自律」「稚心を去れ」「質実剛健」を掲げ、知・徳・体の調和のとれたたくましい人材の育成を目指す。部活動の加入率は、各学年とも80%を超える。

設立　1889（明治22）年

形態　全日制／普通科、文科情報科／共学

生徒数（1学年）　約400人（現1年生のみ約440人）

10年度入試合格実績（現浪計）　国公立大は、東京大、京都大、大阪大、神戸大、九州大、宮崎大など271人が合格。私立大は、慶應義塾大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大、西南学院大などに延べ302人が合格。

住所　〒880-0056　宮崎県宮崎市神宮東1-3-10

電話　0985-22-5191

Web Site　http://www.miyazaki-c.ed.jp/miyazakiohmiya-h/

とへのチャレンジを奨励し、生徒の自主性と自律心を育てる。これが同校の指導方針だ。

「帰属意識」「達成感」「リーダーとしての意識」醸成が狙い

同校の行事の特色は、年度前半に全校生徒参加の行事が集中していることだ（図）。

「年度始めに生徒全員が参加する行事をきちんと遂行することで、学校としてのまとまり、クラスのまとまりが出やすくなります。校歌を皆で声を合わせて歌うことも多く、特に1年生にとっては愛校心がわき、学校への帰属意識を高められるという効果があります」（高原先生）

生徒主体の行事の中で、自分の役割を遂行する使命感を持ち、うまくいった時の達成感を味わうことで、自分が周囲に役立ったという実感と自信を醸成することも狙いの一つだ。

行事を通して、リーダーとしての意識も醸成されるという。

「本校の生徒会長には、学校の人気者が選ばれます。また、リーダーになることが、素直に『かっこいいこと』と感じる生徒がたくさんいます。そうした生徒が、行事を通して先輩の活躍を見て憧れを抱き、自分たちも先輩のようになりたいと思うようになります。この好循環が定着しているのが、本校の強みです」（高原先生）

「リーダーでなくても、その過程で仲間と衝突することがあるはずです。そうした苦い経験をしているからこそ、リーダーとして皆を動かしている生徒に尊敬の念を抱きますし、集団としての規律を守るようになるのです」（黒木先生）

同校の行事は、生徒会役員だけでなく、多くの生徒が積極的に運営にかかわる点が特徴だ。生徒会役員は各行事の中心的な役割を担うが、規模の大きな行事では、新たに実行委員とスタッフを組織して行事の企画・運営をする。実行委員は有志だが、希望する生徒は多い。委員やスタッフとなる生徒は、年間延べ200人に上る。9月の弦月祭のスタッフだけでも110人もいる。

「生徒会役員のように常時、行事にかかわるのは時間的にも体力的にも厳しいけれども、行事を盛り上げたいという生徒は大勢います。ある意味で『二番手』の仕事に積極的に

図　生徒主体で実施する主な行事（年度前半）

4月　「新入生オリエンテーション」

入学直前の新1年生に校歌・応援歌の練習、校内見学、部活動紹介などを行う。新入生への歌唱指導や校内案内などを担当するチューターは、新2、3年生から募集する。2010年度は134人が応募。意気込みなどをエントリーシートに書いてもらい、生徒会役員で選考し、教師が確認して約90人に絞った。チューター指導や当日の運営は生徒会役員が行う。

4月　「歓迎遠足」

全校生徒で近隣の公園に行き、午前中はクラス対抗のレクリエーションを実施。午後はクラスごとの自由行動となる。最後に全校生徒で公園内のゴミを拾うのが恒例。実行委員が中心となり運営する。

5月　「4校定期戦」

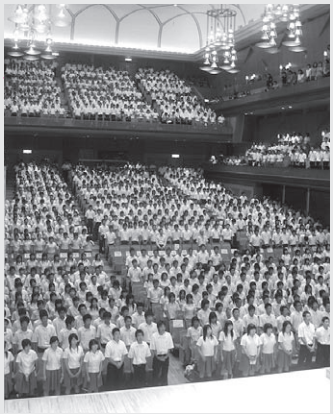
市内県立普通科系高校4校による野球の交流戦。全校生徒が甲子園のスタイルで応援合戦を繰り広げる。応援は生徒会役員と応援団が指導し、事前に全校で練習する。当日、生徒約1200人を誘導するのは生徒会役員と実行委員。あらかじめクラスごとに座席表を作って利用ゲートなどをシミュレーションし、クラス代表に伝達。短時間で移動できるようにしている。同校が当番校となった2009年度は他校との調整も担当。

7月下旬～8月上旬　「オープンスクール」

中学3年生とその保護者を対象とした学校説明会。学校説明や部活動紹介の企画・運営を生徒会役員が担当。校内案内役のチューターを1、2年生の各クラスから2人募集する。2日間で約1400人が来校。

9月上旬　「弦月祭（文化祭）」

同校最大の行事。実行委員を募集・選考し、7月から本格的な準備に入る。内容は、クラス対抗の合唱コンクール、各文化部の公演や展示・発表、全校生徒でのシンポジウムなど。地域住民も大勢来校する。



弦月祭での合唱の様子。生徒全員で歌う姿は圧巻だ

参加する生徒が多くいることが、学校全体として行事が活性化している要因だと思います」（高原先生）

大勢とのかかわりの中で自分を客観視できる

こうした行事を、生徒自身はどのように捉えているのだろうか。現在3年生の第110期生徒会総務委員長は6月に任期を終え、自身の活動をこう振り返る。

「生徒会役員や実行委員の仕事は大半が裏方であり、他部署との連携で物事が進みます。忙しい時ほど連絡を取り合うのが難しく、些細なことで進行が滞ることもありました。でも、行事の成功を見て、自分が役に立ったと思う瞬間は何にも代え難いものがありました。また、スタッフはもちろん、先生や先輩など、いろいろな人とかかわる中で、自分の悪いところや良いところが見え、少しでも成長できたかなと思います」

2年生の時に友だちに誘われて生徒会役員になったという生徒は、忙しいからこそ時間の使い方がうまくなったと話す。

「行事の運営では一人ひとり、役割が異なり、他の人を頼ることは出来ません。行事を通して、自分に割り当てられた仕事に使命感を持って取り組む楽しさを感じました。また、宿題や生徒会の仕事で毎日が忙しかったからこそ、優先順位を付けて物事を進められるようにもなりました」

宮崎県立宮崎大宮高校
黒木 篤 Kurogi Atsushi
教職歴20年。同校に赴任して11年目。進路指導部長。「当たり前のことを当たり前に」

宮崎県立宮崎大宮高校
高原 博 Takahara Hiroshi
教職歴17年。同校に赴任して7年目。生徒指導部。「充実した学校生活＝青春をしっかり送ってほしい」

行き過ぎないようブレーキをかけるのが教師の役目

生徒が作り上げる行事において、教師が果たす役割はどのようなことなのだろうか。

「生徒は何事にも一生懸命で、責任感も強いのですが、それが裏目に出ることもあります。物事を強引に進めようとしている時などには、一呼吸置かせて考えさせるようにしたり、教師が調整をしたりしています。また、生徒が新たな提案をする時は、最初から否定しません。まずは生徒の考えを聞き、学校として出来ること・出来ないことを説明しています」（高原先生）

数年前には生徒の負担があまりにも大きくなったため、弦月祭のクラス展示を取りやめたという経緯がある。現在では準備の解禁日を設けた。練習や準備が行き過ぎないよう、教師はブレーキの役割を果たしているようだ。

行事と学習のメリハリが課題

行事に積極的に参加する生徒がいる一方で、関心の低い生徒も一定の割合で存在する。そうした生徒に少しでも学校に目を向けてもらおうと、生徒会では意見箱を設け、投書には必ず回答をする。また、毎朝校門に立って挨拶運動をし、生徒会活動を身近に感じてもらう取り組みを行っている。生徒会自体が生徒を巻き込む試みをしているところも、同校ならではといえる。

オープンスクールは、以前は教師主体で運営していたが、08年度に生徒会の運営に切り替えた。生徒主体で学校を盛り上げているという特色を、中学生に直接的に伝えたいと考えたからだ。その狙いは的中し、以前にも増して、中学校でリーダー的存在だった生徒や行事に積極的な生徒が志望するようになったという。

課題は、行事を通して培われた自主性と自律心を学習に結び付けることだ。

「行事と学習とのメリハリをつけることが大切ですが、どうしても学習が疎かになりがちです。学年集会では学習のことを忘れないように常に促しています。3年間という限られた時間の中で、少しでも人間的に成長し、社会で強く生きていける生徒を育てるために、まだまだ多くの課題があります」（黒木先生）

学校事例 2

茨城県立多賀高校

行事の時期を見直して学校生活にリズムを作り生徒の自立心を育てる

茨城県立多賀高校は、3年間を見通したキャリア教育を実施している。行事もキャリア教育の体系に組み入れ、実施時期を見直した結果、生徒の学校生活のリズムが生まれてきた。

主体性を重んじる伝統が意欲の低下を招く

茨城県立多賀高校は茨城県北部の日立市にある中堅の普通科高校だ。2005年度から、3年間を見通したキャリア教育体系の構築を進めてきた。この背景には、いわゆる学校の荒れがあった。同校の進路実績は90年代の中頃までは堅調に推移し、中堅進学校として地域からの信頼も厚かった。ところが、2000年代に入って生徒の気質が徐々に変化し、問題行動が目立ち始めた。当時を知る2学年主任の松田貴先生は、その原因を次のように話す。

「バンカラで自由な校風が本校の伝統でした。しかし、教師が生徒の自由を尊重するあまり、多くの生徒が自由と自分勝手を履き違えるようになりました。進学や部活動の実績が低迷し、志願者数も減りました。定員割れと学力低下の繰り返しという悪循環に陥っていたのです」

数字に表れる以上に深刻な問題だったのは、生徒の学校生活全般に対する意欲の低下だった。

「一生懸命に頑張る生徒が馬鹿にされる風潮がありました。生徒はまじめに勉強や行事に取り組むのが恥ずかしいと言うようになり、退廃的な雰囲気が学校から活気を奪っていたのです」と松田先生は語る。

実施時期を見直し行事の質と効果を高める

活力ある学校を取り戻すため、同校が進めたのが3年間のキャリア教育の体系化だ。生徒指導・特別活動・進路指導を3本柱に、生徒の自己効力を高めながら自立を促す仕組みだ（**図1**）。主に特別活動で実施される「行事」は、適切な「子ども性の発揮」と位置づけた。ビジョン委員会委員長の長山祐司先生は、行事の意義を次のように説明する。

「教師が学校生活も学習も厳格に指導するだけでは、生徒は学校がつまらないと感じます。生徒指導で厳しくする分、行事や部活動で発散させて、先生や生徒同士が良い関係を築くことで、学校への帰属意識を高めたいと考えました。行事は、学校生活のリズムをつくると共に、良い学校文化をつくるためにも不可欠なのです」

PROFILE

茨城県立多賀高校

◎「文武不岐」を校是とし、文武両道を目指す。2004年度に教育改革に着手。05年度から体系的なキャリア教育の体制を構築。09年度卒業生は、高い進学実績だけでなく、進路未定と非正規雇用者が1％にまで減少した。

設立　1953（昭和28）年

形態　全日制／普通科／共学

生徒数（1学年）　約280人

10年度入試合格実績（現浪計）　国公立大は、茨城大、都留文科大、会津大に計11人が合格。私立大は、常磐大、明治大、駒澤大などに延べ214人が合格。

住所　〒316-0036　茨城県日立市鮎川町3-9-1

電話　0294-33-0044

Web Site　http://www.taga-h.ed.jp/

かつてはこの指導の流れに一貫性がなかったと、09年度までビジョン委員会委員長を務めた廣木喜博先生は指摘する。

「進路指導、教科指導、部活動の指導と、教師がそれぞれの立場で必要なことを行っていたため、大事な場面で行事が重なってしまうことがありました。面談と進路ガイダンス、部活動と課外が重なり、優秀な生徒を学校内で奪い合う状況が生じていたのです。キャリア教育の構築に当たり、それぞれの取り組みの効果が最大限に発揮されるよう、定期考査や模試、面談、学校行事などの時期を適切に配置するところから検討を始めました」

茨城県立多賀高校
田代 寛 Tashiro Hiroshi
教職歴20年。同校に赴任して4年目。進路指導部長。「校訓の精神を生徒にしっかり伝えていきたい」

茨城県立多賀高校
小川次郎 Ogawa Jiro
教職歴14年。同校に赴任して3年目。特活部長。「教育では生徒への情熱が何よりも大切」

茨城県立多賀高校
松田 貴 Matsuda Takashi
教職歴28年。同校に赴任して15年目。2学年主任。「できることからコツコツと」

茨城県立多賀高校
長山祐司 Nagayama Yuji
教職歴18年。同校に赴任して10年目。ビジョン委員会委員長。「人間力のある生徒を育てたい」

茨城県立多賀高校
廣木喜博 Hiroki Yoshihiro
教職歴19年。同校に赴任して8年目。2学年副主任。「物差しづくり（シラバス）が重要と考えています」

例えば、進路ガイダンスは例年6月に実施していたが、その月には面談やクラスマッチがあるため、5月に移動。文化祭は、推薦入試受験者の増加に対応するため、11月から9月に早めた。部活動は1年生の9月までは全員加入を原則とした。

また、行事で学校生活のリズムをつくる工夫もしている。同校では前期と後期（同校は2期制）に各1回、「ピーク」となる行事を配置した。前期のピークは6月第1週のクラスマッチ、後期は9月第3週の文化祭・体育祭である。

「子ども性を発揮し、学習に前向きに取り組ませるためには、ピークは年2回が適切だと考えました。特に6月は入学やクラス替えの直後で、クラスを一つにまとめるきっかけがほしい時期です。クラスマッチは時期的にも内容的にも、クラスの結束を固める上で欠かせない行事です」（長山先生）

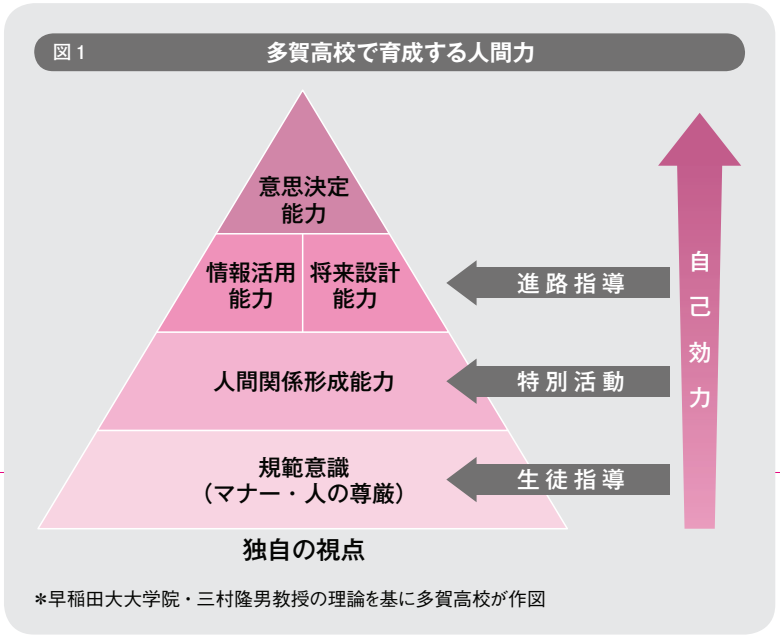


図1 多賀高校で育成する人間力

＊早稲田大大学院・三村隆男教授の理論を基に多賀高校が作図

生徒の自己効力を高めるためにどう手を掛けるか

実施時期と共に重要なのは、行事の中で生徒が達成感を得られる場面をどれだけ多く設けられるかという点にあると、特活部長の小川次郎先生は説明する。

「『自分たちにはこれが達成できた』という経験を足場にし、生徒は次に何が出来るかを考えられるようになります。その足場がしっかりしたものであればあるほど、次のステップに進みやすくなる。これが生徒の自立につながると考えます」

だからこそ、行事を成功に導かなければならないと、小川先生は強調する。その最たる行事が、6月のク

ラスマッチだ。全校生徒がサッカーやテニスなどの競技から一つを選択し、2日にわたってクラス対抗で戦う同校最大の行事である。かつて、競技はトーナメント戦だったため、1回戦で敗退した生徒はそこで競技終了となっていた。そこで、予選はリーグ戦とし、最低2回は出場できるようにした。更に、1日目で負けて競技が終わった生徒は、翌日に別の競技に出場できることにした。

2日目の最後には、閉会式の会場となる体育館で、競技別に参加していた生徒が全員集まり、クラス対抗の綱引きを行う。クラス全体、学校全体が一つになり、体育館は割れんばかりの歓声と熱気に溢れる。これも、生徒に達成感を味わわせるための工夫の一つだ。

運営面では、生徒自身に任せる場面を数多く設ける。競技の審判は同一種目の運動部に所属する生徒が行う。1年生も審判員となるが、盛り上がりやすい2・3年生の試合は、経験豊富な3年生が取り仕切る。競技の記録は新聞部、開会式や閉会式は放送部が行うなど、文化部の生徒が活躍する場面も設けた。

教師の役割として、生徒が自己効力感を得られるように、生徒に気づかれないよう手を掛けることもあると、松田先生は話す。

「私たちがある程度のお膳立てをした上で、生徒に任せられるところは任せる。生徒の主体性や行動力を見て、どこまで生徒に任せるのかを見極めることが大切です」

行事が育んだ一体感が強い集団をつくる

行事を通して培われた生徒同士の信頼関係が自立への大きな一歩になることも、同校では珍しくない。進路指導部長の田代寛先生は次のように話す。

「自信が持てずに一人ではなかなか前に進めなかった生徒も、友だちとの信頼関係の中で自然と一歩を踏み出せることがあります。それがすぐに学習意欲につながるというわけではありませんが、行事を通して得た周囲との連帯感や自信が、前向きに頑張ろうという意識をつくり出すのだと思います」

卒業生の一人は自身の体験を次のように振り返る。

「3年生の文化祭では、クラスの出し物としてお化け屋敷を企画しました。どうすれば怖くなるか、面白くなるかをみんなで考えるうちに、クラスが一つになっていくのを感じました。仲間同士で支え合う雰囲気が生まれて、勉強をおろそかにしている友だちがいれば注意するようになり、自分が勉強に身が入らないときは、逆に友だちから『しっかりしろ』と励まされたこともありました。友だちの支えがあったからこそ、つらい受験勉強も乗り切れたのだと思います」

「自立とは、生徒同士の支え合いの中で一人ひとりの心が強く育っていくことなのかもしれません」

生徒の姿を見て、長山先生はこのように述べる。

「本校の行事は、キャリア教育の観点から見ても、生徒の自立を促す上で効果的であると自負しています。本校の実践が伝統的な行事の在り方と比べて、特に目新しいわけではありません。一つひとつの行事の持つ価値を見直し、学校教育が本来持っていたノウハウをしっかり生かしていくこと、そして何よりも大人が子どもとしっかりかかわることが大切なのではないでしょうか」

図2　特別活動における行事の位置づけ

	特別活動	
	人間関係形成能力 あらゆるシーンでやり遂げた経験を多く積ませ、自己効力を高め、進路決定のためのやる気と自信、そして実行力、体力を身に付けさせていく	
	学校行事	部活動
1年次 他律	・クラスメートとの人間関係の構築 ・教師との人間関係の構築 ・学校が楽しい（子ども性の発揮） ・遊びを通して協力の大切さを学ぶ ・主体的に自分の役割を果たす ・互いに尊重し合う態度を養う ・共に協力し支え合う態度を養う	・フォロワーシップ ・挨拶・礼儀 ・言葉遣い ・忍耐力 ・謙虚さ・まじめさ
2年次 自律		・自分の役割に気づく ・個性の伸長 ・個性の発揮 ・チームへの貢献 ・創意工夫 ・向上心
3年次 自立		・リーダーシップ ・的確な判断力 ・自己のマネジメント ・自信
狙い	コミュニケーションを進化させ、良き学校文化を創り出す	

部活動・行事で培われる力を示した図。教科指導、生徒指導、進路指導領域に関してもすべて同様に作成している
＊学校資料を基に編集部で作成

学校事例 3

広島県 福山市立福山中学校・高校

中高一貫ならではの行事で学校への帰属意識とクラスの結束力を高める

併設型中高一貫校となって7年目になる福山市立福山中学校・高校の課題は、学校への帰属意識と生徒の結束だ。学校行事と学年行事により、中入生（内進生）と高入生（外進生）、高校生と中学生とのかかわりを通して自立を促す。

学校の求心力を高めることが最大の課題

2004年度、100年以上の歴史を持つ福山高校に中学校を併設し、併設型中高一貫校として福山市立福山中学校・高校は再スタートした。難関大合格、進学実績向上を目指し、国公立大80人を目標に掲げた。10年3月に卒業した1期生は、旧帝大を含む国公立大に73人が合格。目標には僅かに届かなかったものの、今後の躍進に期待をつなぐ好実績を挙げた。

中高一貫校として7年目を迎えた同校にとって、課題は二つある。一つは、生徒の学校への帰属意識を高めることだ。中学校教務主任の脇祥貴先生は、「本校はまだ地域から進学校としての確固たる信頼を得ていません。中学校の成績上位層の中には、卒業しても福山高校に行かず、他校へ進学する生徒もいます。すべての生徒に福山高校へ進学してもらえるよう、学校に誇りを持てる指導を行う必要があると考えています」と話す。

もう一つの課題は、中入生と高入生の融和だ。高校にとって学校への求心力を高めることは大きな課題だが、生徒の3割は高校から入学する高入生であり、中入生との融和を促すことが、高1における最大の課題である。高校2学年主任の土井光憲先生は次のように述べる。

「中入生には中1から日々の学習や行事を通して培われた結束があります。それが学校に活力を与えるのは事実ですが、高入生にとっては中入生の輪に入りづらい、あるいはそのために本校を敬遠する中学生もいます。この二つの集団をいかに融合させるかが、学校を活性化させる上で重要な鍵だと考えています」

中高一貫校に欠かせない「縦軸」「横軸」の視点

同校は、中高一貫校ならではの特

PROFILE

福山市立福山中学校・高校

◎1899年開校の私立女学校が前身。69年に福山市に移管して市立福山高校と校名を変更、2004年度に中学校を併設し中高一貫校となる。校訓は「interaction（共感）・intelligence（知性）・intention（意志）」。部活動では、少林寺拳法部、放送部が全国大会の出場多数。

設立　1899（明治32）年

形態　全日制／普通科／共学

生徒数（1学年）　約200人（中学校は約120人）

10年度入試合格実績（現浪計）　国公立大は、北海道大、神戸大、鳥取大、岡山大、広島大、山口大、愛媛大など73人が合格。私立大は、上智大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ150人が合格。

住所　〒720-0843　広島県福山市赤坂町赤坂910

電話　084-951-5978

Web Site　http://www.edu.city.fukuyama.hiroshima.jp/kou-ichifuku/

性を踏まえた行事を行っている。

高校3学年主任の石田光敏先生は次のように話す。

「本校では高1から高入生と中入生という異質の集団が混ざり合うため、中学、高校1年、2年、3年という『縦軸』と共に、クラスの団結という『横軸』も重視しています。行事を通じ、学校への帰属意識を高め、クラスの結束力を強くすることで、生徒の自立心を育てることが出来ると思います」

クラスの結束力を高める「横軸」の行事

「横軸」をつなぐ起点は、高1の4月に行う2泊3日の宿泊研修だ。

2日間にわたって行われる一樹祭は、1日目は保護者のみ公開、2日目が一般公開される。写真上は吹奏楽部の演奏会、写真下は中学生の合唱の様子

高校生としての心構えや生活習慣、学習の仕方などを徹底的に身に付けさせる研修に、生徒自身が主体的に取り組める行事を取り入れている。研修最終日には、学年全体で取り組む行事を生徒自身に企画・実施させる。研修前に各クラスから2人ずつ代表者が集まって内容や実施方法を話し合い、役割分担から必要な道具類の調達まですべて生徒が行う。10年度はクラス対抗長縄跳びが行われ、クラスの結束が試される場となった。

高入生にとって、中入生の行動力や段取りの良さなどは大きな刺激になる。高校1学年主任の松村和司先生は次のように述べる。

「宿泊研修では、集合の様子一つを見ても、中入生の比較的多いクラスは行動が早く、まとまりの良さを感じました。それは高入生の多いクラスも意識しており、自分たちのクラスをまとめるにはどうしたら良いか、クラス代表を中心に真剣に考えていました。宿泊研修は、中入生と高入生がそれぞれの違いを認めて、切磋琢磨するきっかけになっていると感じます」

その後の学校生活でも、高入生と中入生が刺激を与え合っている場面はよく見られると、高校2学年担任の真弓祥子先生は話す。

「学校行事の準備をしている生徒の様子を見ていても、段取りの良さや、下校時間を守ろうとする姿勢は、中高一貫校になる前の福山高校の生徒と比べて、格段に良くなっています。行事や部活動などさまざまな場面で、中入生と高入生が互いに良い刺激を受けながら、クラスの結束力を高めていると感じます」

高校2、3年生になると、中入生と高入生の差はほとんどなくなる。行事は、中学校、高1と培ってきた結束力を土台に個々の生徒の主体性を高めることに重点が置かれ、LHRや学年集会など、生徒が発表する機会を数多く設けている。特に、2年生で行う学部・学科研究、ライフプラン作成などの進路学習の成果発表は、主体的な進路選択、学びへの意欲の醸成にもつながっている。

学校への帰属意識を高める「縦軸」の行事

学校全体の帰属意識を高める「縦軸」を担う行事は、中高合同で行う体育祭や文化祭だ。

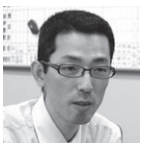
体育祭は、中1～高3の全生徒が参加する。中1女子から始まり高3男子がアンカーを務める「色別対抗リレー」、中1生が先輩の背中を歩いて進む「川下り」のように、中高生が合同で参加する競技もある。

「中学生にとって高校生から受ける刺激はとても大きなものです。自分も先輩のようになりたいという思いが刺激となり、中学生の成長を促します。また、上級生は、後輩の視線を受けて先輩としての自覚が生まれます。幅広い年齢層の生徒が刺激し合い成長していく仕組みが、本校の行事にはあるのです」（松村先生）

毎年6月に実施される文化祭「一樹祭」は同校最大の行事で、中・高校生の保護者だけでなく、地域の多くの人々が集まるイベントだ。部活動や委員会の発表のほか、学年別に

設定されたテーマに基づき、クラスごとに展示や出し物を企画・実施する。出し物の内容の決定や準備は、すべて生徒主体で行う。

「高2での一樹祭が、生徒にとって『自立』の転換点になっていると思います。生徒の自主的な取り組みに対して、教師は出来るだけ口を出さないようにしています。10年度の一樹祭では、高2の出し物の中に、一般の方々に見せる価値があるのかと疑問に思う出し物もありました。しかし、担任会で検討した結果、生徒が主体的に取り組んでいる姿を見て、勇気を持ってそのまま続行させることに決めました。結果だけではなく過程そのものを評価し、生徒が成長するきっかけにしたいと考えています」（土井先生）



福山市立福山中学校・高校
松村和司 Matsumura Kazushi
教職歴18年。同校に赴任して9年目。高校1学年主任。「生徒にはキラリと光るものを持ってほしい」

福山市立福山中学校・高校
土井光憲 Doi Kouken
教職歴28年。同校に赴任して7年目。高校2学年主任。「生徒の可能性を信じて指導に当たっていきたい」

福山市立福山中学校・高校
石田光敏 Ishida Mitsutoshi
教職歴26年。同校に赴任して6年目。高校3学年主任。「生徒をひきつける授業を心掛けたい」

福山市立福山中学校・高校
真弓祥子 Mayumi Sachiko
教職歴12年。同校に赴任して7年目。高校2学年担任。「意志あるところに道は開ける」

福山市立福山中学校・高校
脇 祥貴 Waki Yoshitaka
教職歴25年。同校に赴任して8年目。中学校教務主任。「苦難にもめげず、頑張る生徒を育てたい」

決められた枠組みの中で最大限主体性を発揮させる

中学、高校と、行事で鍛えられてきた生徒の中には、3年生になると教師の決めたルールを窮屈と感じる生徒もいる。09年度には一樹祭の運営に関してこんなことがあった。

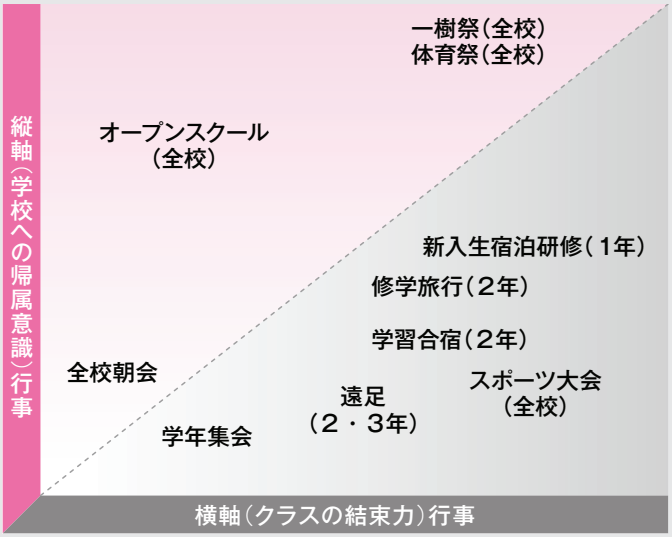
「中高一貫校に移行した後、教師側でつくった一樹祭の進行方法や内容などのルールに対し、あるクラスの生徒がそれを足かせと感じて『元に戻してほしい』と校長に直談判しに来ました。しかし、教師が制度を変えた理由を丁寧に説明し、決まりを変更することなく取り組ませました。結果的に、一樹祭に向けた生徒の結束力が高まり、そのクラスの出し物が、その年の一樹祭で最も高い評価を得たのです」（石田先生）

「やると決めた以上、与えられた条件の中でベストを尽くす。行事を通して生徒を自立に向かわせるためには、教師や学校が壁や枠組みを意図的に用意し、その枠組みの中でいかに活動させるかが必要なのです」（土井先生）

今後の課題は、行事で培った主体性を、自律的な学習に結びつけていく点にある。現在、中学校における家庭学習は平均3時間あるが、高校に進級すると、その時間は3割ほど減少する。

「単に課題の量を増やすのではなく、生徒が自分に必要な学習内容と量を見極め、主体的に進められるようにすることが、高校での大きな課題です。その際、教師がどの程度かかわれば良いのか、常に意識する必要があると思います」（石田先生）

図 学校行事の縦軸・横軸



*学校資料を基に編集部で作成

島根県立
益田高校

導入期指導

導入期指導の徹底と地域との連携を通して未来を切り開く力を育てる

◎「知性に富み、心身共に健やかで、自らの力で未来を切り拓く生徒を育てる」を教育目標として、生徒一人ひとりの「学力保障」「資質保障」「進路保障」を目指す。2004年度にSSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業の指定を受け、理系人材の育成にも力を入れる。

設立
1912（明治45）年

形態
全日制／普通科、理数科／共学

生徒数
1学年約200人

10年度入試合格実績（現浪計）
国公立大には、京都大、大阪大、神戸大、島根大、岡山大、広島大、山口大、九州大、島根県立大、県立広島大などに 146 人が合格。私立大には、青山学院大、慶應義塾大、中央大、東京理科大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大など延べ 128 人が合格。

住所
〒698-0017
島根県益田市七尾町1-17

電話
0856-22-0044

Web Site
http://www.masuda.ed.jp/

変革のステップ

背景
◎高校生になりきれない生徒が増え、中高のギャップを克服させる必要性が高まる
STEP 1

実践
◎導入期指導、学習記録、面談などで生徒の学びへの意欲を高めると共に、SSHを契機に地域連携を深める
STEP 2

成果
◎国公立大合格者が過去十数年で最高の実績を記録。SSHにより地元の良さを再認識する生徒が増加
STEP 3

中学校と同じスタイルで学習に取り組む生徒たち

島根県西部を代表する進学校である島根県立益田高校は、2010年度入試で著しい躍進を遂げた。過去10年、約80～90人で推移していた現役国公立大合格者が125人を記録。合格率も64・8％と09年度の55・9％を大きく超えた。

例年に比べて、入学時の学力が高かった学年というわけではない。他の多くの高校と同じように、同校も生徒の気質変化に戸惑っている。進路指導部長の長岡正和先生は、自校を次のように分析する。

「学習習慣が身に付いていないまま入学する生徒が多く、学力の幅は年々広がっています。元気はあるけれども、基礎学力の定着していない生徒が増え、年々手を掛けなくてはならなくなっていることを感じます」

中でも悩みの種は、中学校の学習の延長で高校の学習に臨む生徒が多いことだ。生徒の中には中高の壁に悩み挫折感を味わう者もいる。1学年主任の村岡英子先生は言う。

「多くの生徒は大学進学を希望しますが、その気持ちと勉強の必要性が結びついていないように感じます。学習といえば定期考査対策というような認識しかないため、高校に入学して自分より勉強の出来る友だちを目の当たりにして、初めて勉強とは何だろうと考え、

壁に突き当たる生徒は大勢います。高校生らしい学びに向かわせること、いかに早く目標を持たせられるかが指導のポイントになると考えています」

「益高生」になることが生徒たちの最初の課題

こうした課題を受け、ここ数年同校が力を入れているのが導入期指導だ。

島根県立益田高校
長岡正和 Nagaoka Masakazu
教職歴26年。同校に赴任して3年目。進路指導部長。「何事も気力、体力、精神力」

島根県立益田高校
福井文生 Fukui Fumio
教職歴25年。同校に赴任して7年目。SSH担当。「Take it easy」

島根県立益田高校
大庭荘平 Oba Shohei
教職歴17年。同校に赴任して3年目。教務部長。「仏作って魂入れる」

島根県立益田高校
村岡英子 Muraoka Eiko
教職歴14年。同校に赴任して7年目。1学年主任。「常識にとらわれず、自分の頭で考えて行動すること」

「中学校で学び合いやグループ学習などを経験しているためか、最初は高校の授業スタイルに慣れない生徒も多くいます。入学時に『学び方』を伝えることで、生徒の意欲を喚起し、学ぶ態度を早急に育成する必要性を感じていました」（長岡先生）

導入期指導の柱は、3年前に始めた「新入生橋渡しウィーク」だ。入学直後の1週間に、オリエンテーション、服装・挨拶指導、学習の仕方や授業の受け方などの学習ガイダンスを行う。狙いは、中高の円滑な接続の実現だ。学習面では、国語、数学、英語をそれぞれ2時間以上、他教科は1時間ずつ当て、授業計画や方針、評価方法の説明を行う。

特に重視するのは、「益高生」としての自覚を持たせることだ。「新入生橋渡しウィーク」の最初の土曜日には学年集会を開き、取り組みの意義を伝え、生徒部、進路指導部、教務部などの各分掌が「益高生」としての心構えを説く。

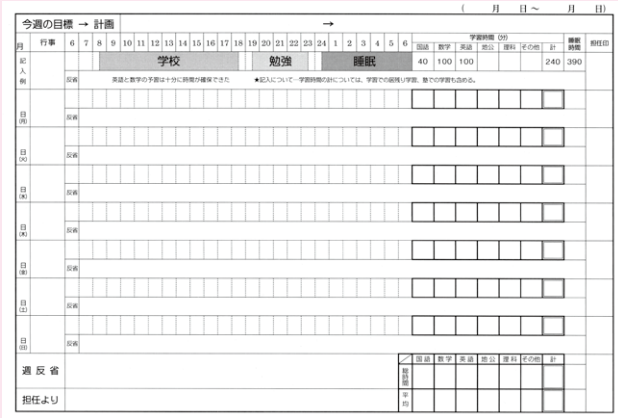
また、「新入生橋渡しウィーク」は教師の決意表明の場でもあると、長岡先生は話す。

「『自らの未来を自らの手で切り拓く力を身に付けた人材』というのが、教師が求める益高生です。そのために教師は、進路実現に必要な学力（学力保障）、勤労観や生き方の確立（資質保障）、将来の目標に応じた進路の実現（進路保障）に向けて、生徒をしっかり支援していくことを表明するのです」

教科ごとの学習時間を把握し指導の改善に生かす

「新入生橋渡しウィーク」で培った学びへの意欲を、実際の学習活動につなげることにも力を入れる。「私のキセキ（軌跡・奇跡）」は、各教科の学習時間や食事、睡眠など生活全般を確認するための生活記録で、入学時から3年間、毎日朝のHR時に記入し、提出させている（図1）。家庭学習の時間や教科のバランス、就寝時間などをチェックし、教師は個々の生徒の変化を把握する。

図1 「私のキセキ」



今週の目標 → 計画 →　（　月　日～　月　日）

月	行事	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	1	2	3	4	5	6	学習時間（分）国語	数学	英語	地公	理科	その他	計	睡眠時間	担任印
記入例				学校												勉強				睡眠							40	100	100				240	390	
		反省	英語と数学の予習は十分に時間が確保できた　★記入について一学習時間の計については、学習での説明し学習、塾での学習も含める。																																
日(月)		反省																																	
日(火)		反省																																	
日(水)		反省																																	
日(木)		反省																																	
日(金)		反省																																	
日(土)		反省																																	
日(日)		反省																																	
週反省																											ノ	国語	数学	英語	地公	理科	その他	計	
																											総時間								
担任より																											平均								

学習時間だけでなく、就寝時間も記入させ、無理をしていないか確認する
＊学校資料をそのまま掲載

「私のキセキ」は、学年全体の課題を把握する上でも欠かせない取り組みだ。年10回、新学期開始直後、定期考査直後、長期休暇前、高校総体の県予選直後など、生徒の学習習慣が乱れがちな節目となる時期に、生徒全員の1週間分の学習時間を、担任と副担任がパソコンに入力。学年ごとに、学年全体と各学級の学習時間、それぞれの教科の学習時間などを集計し、学校全体で共有する。

データのうち、特に着目するのは学習量の教科バランスだ。教務部長の大庭荘平先生は次のように説明する。

「どの教師が受け持っても、同じレベルの指導が出来るよう、教科全体の指導力を高めていくのが狙いです。年度当初なのに特定の教科だけ学習時間が少ない、平日の学習時間に比べて休日の学習時間ばかりが多い、3年生になっても理科や地歴の学習時間が増えていないなど、教科ごとの課題を浮き彫りにすることで、教科担当が授業の進め方や課題の出し方、生徒への意識づけなどを見直すきっかけとなっています」

データは、学級経営にも有用な情報を提供している。他クラスに比べて学習時間や睡眠時間が少ないといった生活の乱れが見られれば、担任から生徒にさまざまな声掛けや意識づけを行う。担任自身が気持ちを引き締める契機にもなっているのだ。

情報は教師が調べて伝え 生徒の信頼と意欲を高める

教師が足並みをそろえ、全員体制で指導に臨んでいることも、同校の躍進を支える重要な要素だ。学年集会では、定期的に進路情報の提供や進路意識を高めるための講演を行うが、外部から講師は招かず、すべて同校の教師が自分で調べた情報、経験を基に生徒へ投げかける。学年通信では、B4用紙両面分のエッセイを教師全員が輪番で執筆する。学校行事や定期考査など直近の話題を中心として、自身の高校時代の体験、時事問題なども交えながら生徒にエールを送る。

生徒把握や意識啓発のために、面談も頻繁だ。「私のキセキ」や進路希望調査、模試結果などを基に、生徒1人当たり年7、8回は行う。もちろん、気になる生徒がいれば日常的に話を聞く時間を設ける。授業前の時間や昼食の時間を割いて面談に当たる教師も多い。

「本校では、進路講演や学年通信、面談など、教師が自ら調べたり、生徒に語り掛けたりする場面が多い。このことが教師や学校に対する生徒の信頼感を高め、実績に結びついているのではないでしょうか」（長岡先生）

指導に時間と手間を惜しまない教師の意欲、その期待に応えようとする生徒の思いが、同校の活力を生み出している。

地域に焦点を当てたSSHで 地元の良さを再認識させる

生徒自らが将来の目標や志望を見いだし、未来を切り開く力を高めることも同校の重要なテーマだ。その点で効果を挙げているのは、04年度から指定を受けているSSH（スーパーサイエンスハイスクール）の取り組みだ。07年度には更に5年間の継続指定を受けた。同校のSSHのテーマは「地域連携」だ。SSH担当の福井文生先生は、その背景を次のように話す。

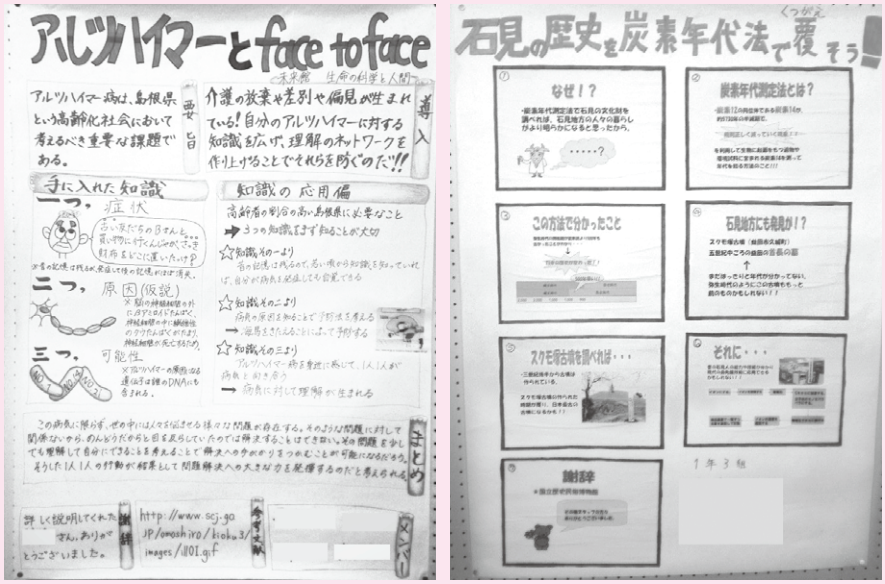
「益田市の中心産業は農業や漁業、商業であり、数十年前から人口の流出が進んでいます。一昨年には卒業生の9割が県外に出ました。また、地域に大学や研究施設がないため、理数教育への関心を育てるのが難しい面があります。最先端の科学に触れさせ、科学への興味を深めると共に、『地域の素材』を積極的に取り入れることで、地元の良さを再認識させたいと考えています」

同校のSSHは、1年次必修の学校設定科目「サイエンスプログラム」により、文系・理系を問わず、生徒全員が参加するところに特徴がある。7月の地域巡検では、地域のさまざまな科学施設を9コースに分かれて訪問。12月の東京実習では、首都圏の大学、研究機関、企業など、3～4施設を訪れて、見学や体験学習を行う。更に、理数科の生徒は、2年次10月の大学

連携実習で島根大、広島大、山口大を訪れ、講義・研究実習に参加する。いずれの活動も、連携先から事前に課題を受け、調べ学習を行い、連携先に報告。その後、訪問して実習を行い、成果を校内で発表する（図2）。

「例えば、近年、弥生時代の年代が従来の定説よりさかのぼっているのは、新たな発掘や科学的な分析の成果です。実際に研究している専門家からそうした話を聞くことで、生徒は文系・理系の垣根が無くなりつつあることに気づきます。また、今学んでいることが最先端の研究に結びついていると気づけば、たとえ苦手教科の学習でも興味を持って取り組めるのではないでしょうか」（福井先生）

図2　「サイエンスプログラム」の成果発表で生徒が作ったポスター



「サイエンスプログラム」で調べたことをポスターにまとめ、発表会を行う
＊学校資料をそのまま掲載

教師一人ひとりが「授業のプロ」を目指して

10年3月に卒業した学年のうち、理系志望者は1年生時点で学年全体の4割だった。それが、2年生で5割、3年生では6割まで増えた。アンケートの自由回答では、「地元が都市化すれば良いと思っていたが、自然豊かな県として発展させるべきだと思うようになった」「都会に行くことしか頭に無かったけれども石見の良さを再発見できた」といった声が寄せられた。

施設への引率などは副担任を含め学年の全教師が担当するため、学年団の結束を固めるきっかけにもなったという。

今後の課題は、教師一人ひとりの授業力を高めていくことにある。

「SSHを通して、生徒は自分で調べて発表する経験を積んでいますが、通常の授業でもそうした場面を増やしたいと考えています。教師も生徒も定期考査や模試で良い点数を取ることを意識しがちです。しかし、SSHの成果を踏まえて、授業の中でも人間力を高めるような指導を取り入れることが、新学習指導要領の理念を実現する上でも重要だと実感しました」（大庭先生）

授業力向上は学校全体の課題と認識し、若手教師に大学入試問題を解かせるなどの施策が具体化しつつある。また、地域との連携も生徒育成のポイントになると、長岡先生は強調する。

「生徒の夢をかなえるためには、本校の力だけでなく、今後は小・中学校との連携など地域全体の教育力を高める取り組みが大切になるでしょう。10年7月には、中国地方のSSH指定校と連携して、地域の子どもを招いて科学講演やポスター発表、出張講座などを行う『益田さいえんすたうん』を開催しました。今後もこうした取り組みを積極的に打ち出し、地域全体で子どもたちの夢をかなえられるような街づくりに貢献していきたいと思っています」

益田高校で育まれた教師の団結は、地域社会へも広がり始めているようだ。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2009年12月号指導変革の軌跡「茨城県立竜ヶ崎第一高校」など
▶▶▶ http://benesse.jp/berd/ → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）

宮城県・私立
聖ウルスラ学院英智高校

自立学習支援

学習と部活動の両立をコースぐるみで支え自ら考え動く生徒を育てる

◎幼稚園から高校までを擁するカトリック系の学校。教育特区の指定を受け、4・3・2制による独自の小中一貫9か年教育を展開。高校は、2007年から特別志学コースType１・２、尚志コースの3コース制とする。バドミントンや卓球、ソフトテニスなどは全国レベルの強豪。

高校設立
1959（昭和34）年

形態
全日制／普通科／特別志学コースは共学、尚志コースは女子のみ

生徒数
1学年200～300人

10年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、北海道大、東北大、宮城教育大、千葉大、宮城大などに24人が合格。私立大は、東北学院大、東北福祉大、青山学院大、上智大、中央大、明治大、東京理科大、早稲田大などに延べ209人が合格。

住所
〒984-0828
宮城県仙台市若林区一本杉町1-2

電話
022-286-3557

Web Site
http://www.st-ursula.ac.jp/high/

変革のステップ

背景
◎中学校や地域からの要望に応え、進学と部活動の両立を目指す特別志学コースType2を新設
STEP 1

実践
◎部活動を考慮した課外や生徒個々に合わせた学習スケジュール作成で、一人ひとりをきめ細かく支援
STEP 2

成果
◎各コースが互いに良い刺激となり、自ら考えて行動する生徒に成長。高校入試での志願者も増加
STEP 3

「特進クラスで部活動もしたい」要望に応えて新コース設置

宮城県仙台市に位置する聖ウルスラ学院英智高校は、かつては部活動が盛んな女子校だったが、03年度に「特別志学コース」と「尚志（しょうし）コース」を設置し、特色化に乗り出した。特別志学コースは、難関大進学を目指すいわゆる特進クラス、尚志コースは従来からの一般クラス（女子のみ）と位置づけた。05年度には、特別志学コースを共学とした。

特別志学コースでは、共学化した05年度から午後6時30分まで授業を行っていたため、生徒は部活動に参加できなかった。これに対し、中学校の教師や中学生の保護者から「特別志学コースに入学させたいが、部活動もさせたい」との声が聞かれるようになった。

07年度、その声に応え、特別志学コースを難関国立大を目指すＴｙｐｅ１と、学習と部活動を両立しながら大学進学を目指すＴｙｐｅ２に分けた。今回は、学習と部活動の両立の課題改善に取り組んだＴｙｐｅ２を中心に取り上げる。

部活動開始時刻を合わせるため朝課外に一本化

特別志学コースＴｙｐｅ２は、１日50分授業×７コマが基本で、午後４時に授業が終わる。

生徒はそれから部活動の練習に参加する。部活動加入率は6～7割で、学校外の習い事に打ち込む生徒も多い。

カリキュラムと授業は、コースごとに設定されている。ただ、部活動は尚志コースとＴｙｐｅ２が一緒に活動する。コース発足当初、部活動を巡って、尚志コースの生徒とＴｙｐｅ２の１期生の間で不和が生じた。特別志学コースＴｙｐｅ２コース長の及川博暁先生はその理由を次のように話す。

「面談の中で、生徒から部活動について『尚志コースの生徒とぎくしゃくしている』と悩みを打ち明けられるようになりました。その原因は、両コースで部活動の開始時間がそろわないことにありました」

当時、Ｔｙｐｅ２では放課後にも課外授業を開いていたため、Ｔｙｐｅ２の生徒は部活動に遅れて参加せざるを得なかったのだ。特別志学コースＴｙｐｅ２の２学年担任阿部仁先生は、生徒の気持ちを次のように代弁する。

「本校にあるのは、掛け持ち的な気持ちでは練習についていけない部ばかりです。Ｔｙｐｅ２の生徒は、尚志コースの生徒に引け目を感じて練習していた面がありました。そこで、２年目の08年度にはＴｙｐｅ２の放課後の課外を廃止し、初年度から実施していた朝7時45分からの30分間の課外に一本化しました。その結果、生徒同士の関係も良くなり、学習、部活動両面での集中力も高まりました。ただ、今でも課題はあります。Ｔｙｐｅ２では土曜日にも授業がありますが、尚志コースにはなく、Ｔｙｐｅ２の生徒が土曜の練習に参加できないのです。学業の充実を考えると練習時間を完全に一致させることは難しいですが、出来るだけすり合わせ、生徒の意欲に応えたいと考えています」

聖ウルスラ学院英智高校
及川博暁 Oikawa Hiroaki
教職歴15年。同校に赴任して5年目。特別志学コースＴｙｐｅ２コース長。「社会に出て、リーダーになれる人材を育てたい」

聖ウルスラ学院英智高校
阿部 仁 Abe Hitoshi
教職歴18年。同校に赴任して18年目。特別志学コースＴｙｐｅ２・２学年担任。「周りに流されることなく、自ら幸せな人生をつかんでほしい」

聖ウルスラ学院英智高校
鈴木祥子 Suzuki Shoko
教職歴20年。同校に赴任して8年目。特別志学コースＴｙｐｅ２・２学年担任。「諦めがちな生徒を追いかける粘り強さを持ち続けたい」

聖ウルスラ学院英智高校
後藤健一 Goto kenichi
教職歴19年。同校に赴任して19年目。特別志学コースＴｙｐｅ２・３学年担任。「人の話に耳を傾け、自分なりの考えを持てる人間に育てたい」

図1　聖ウルスラ学院英智高校のコースの特徴

【特別志学コースType1】
男女共学。目標は東京大や東北大などの難関国立大の一般入試現役合格。週６日制のもと、午後６時30分まで全員が授業を受ける。

【特別志学コースType2】
男女共学。学習と部活動などを両立しながら、難関私立大や中堅国公立大を目指す。東北福祉大との高大連携授業、フランス語の授業など、多様な経験を積める。

【尚志コース】
女子のみ。英語、作法、部活動を三本柱として、厳しく丁寧な指導を行う。大学進学から就職まで幅広い進路に対応し、８割が進学する。

学習と部活動の両立のため一人ひとりのスケジュールを立案

Ｔｙｐｅ２の授業時数は、標準的なカリキュラムよりも3年間で１０００時間ほど多い。だが、多くの部は毎日午後7、8時まで練習をしている。学業と部活動の両立は体力的にも精神的にも大変だ。しかし、生徒は必死に付いていこうとしている。部活動後、教師に質問に来る生徒、隙間時間を何とか活用しようとする生徒など、ひたむきに努力する姿が見られるという。

特別志学コースＴｙｐｅ２・２学年担任の鈴木祥子先生は、生徒の意欲は高いと話す。

「そろそろ帰ろうかと思っても、授業での様子から、生徒が質問しに来るかもしれない

と思って待つことがよくあります。部活動で精根尽き果てているはずなのに『追試をしてください』と来る生徒もいます。自分自身が疲れていてもその気持ちに応えたいと思い、残って対応しています」

なかなか学習時間を確保できないのが、生徒にとって大きな悩みだという。

「コース立ち上げ当時から勉強と部活動の両立は、教師が教え込むだけでは難しいと考えていました。主体的に学べる生徒を育て、高校生活を充実させてほしいという思いがあります。ただ、どうすればそうした生徒が育つのかは手探りでした」（及川先生）

「勉強と部活動を両方とも本気で取り組むのは容易ではありません。どちらも精一杯取り組む生徒ほど、壁に突き当たっています」（阿部先生）

Ｔｙｐｅ２では、学習と部活動の両立のために、生徒全員を集めてスケジュールの立て方を指導する。しかし、全体指導だけでスケジュールが立てられる生徒は少ない。その場合、教師が寄り添い、個別に指導する。まず、中・長期的な目標を立てさせ、その達成に必要な短期的目標を立案。最後に目標遂行のための実行項目を1日単位で列挙させる。中・長期的な目標としては模試や定期テストの点数アップ、検定合格など、3か月程度先を見据えたもの。短期的な目標としては1冊の問題集を終わらせるなど、約1カ月先を照準としたものを設定する。

部活動と両立させた学習スケジュール実現の難しさについて、特別志学コースＴｙｐｅ２・3学年担任の後藤健一先生はこう話す。

「目標とスケジュールを立てても、三日坊主で終わる生徒は多くいました。そうした生徒には、提出必須の課題を課すことにしています。課題は弱点補強や検定対策など、生徒一人ひとりの目標に合わせて準備します。最初は『先生に課されたからしなければ』という受け身の学習から始まりますが、成果が出るうちに自分にはどのような学習が必要なのかを実感し、主体的な学習が出来るようになっていきます。その様子を見て、徐々に課題を少なくし、生徒が立案したスケジュールに則った学習にシフトさせていくのです」

スケジュールを実現可能なものとするためにもう一つ重要なポイントとなるのは、生徒と共に隙間時間の使い方を考えることだ。

「生徒の実行項目に従って、『これを実行するにはどの時間を使う？』と問いかけます。『朝6時半に登校する』『昼休みの時間を使う』など生徒によって答えはさまざまです。大切なのは、生徒自身が考えて時間を捻出すること。教師から『この時間を使いなさい』と一方的に伝えても、継続させることは難しいでしょう」（後藤先生）

1年生の間は、多くの生徒がスケジュールを立てるのに苦労する。根気強くマンツーマンに近い指導を続けることで、2年生の後半までには、多くの生徒が主体的に学習する姿勢が身に付いているという。

自身の弱点を把握し夏の課外授業を生徒が提案

「先生、いつ空いていますか？」

09年度の夏休み前のこと。高3になったＴｙｐｅ２の1期生が、教師の夏休みのスケジュールを聞きに来た。夏休みの後半に課外授業はあるが、前半の期間にも教わりたいと考えた生徒たちが、教師の予定を聞きに来たのだ（**図2左**）。自分たちの部活動の空き時間を洗い出し（**図2右**）、教師の予定とすり合わせて、生徒自ら夏休みの課外授業のカリキュラムを組んだ。主体的に学ぶ生徒へと育った要因は他コースの生徒からの刺激も大きいと、鈴木先生は考えている。

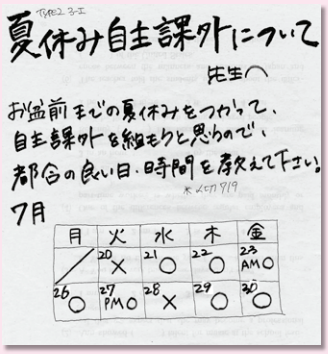
「Ｔｙｐｅ１の生徒は午後6時半まで授業を受け、その後も夜8時頃まで学校に残って勉強しています。更に、帰宅後も学習しています。そうしたＴｙｐｅ１の生徒を間近に見ているＴｙｐｅ２の生徒は、大きな刺激を受けているのでしょう。自分でＴｙｐｅ２を選んだからには部活も最後までやり通したい、Ｔｙｐｅ１の生徒に勉強でも負けたくないという気持ちが強くなっていくようです」

教師が日々手を掛けてスケジュールを作らせていたこととコース間の競争意識が、生徒を自立的学習に向かわせることにつながったのだ。

「生徒はスケジューリングだけでなく、『ベクトルの部分が分からないので、この時間はこの単元を中心に』など、自分たちに必要な学びを要求してきました。これには教師も驚かずにはいられませんでした」（及川先生）

入学当初は教師の助言を受けて毎日のスケジュールを立てていた生徒が、2年後には自ら考え、行動する生徒へと成長していた。

図2　生徒が教師に申し出た夏休みの課外表



［数学］ベクトルについての希望日

7月

月	火	水	木	金
	20 AM 正下 PM 正一	21 AM 正正下 PM 正一	22 AM 正正下 PM 正一	23 AM 正正下 PM 正一
26 AM 正正下 PM 正下	27 AM 正正下 PM 正	28 AM 正正下 PM 正	29 AM 正正 PM 下	30 AM 正下 PM 下

左は教師の予定を聞いた用紙、右は生徒の予定を各自が記入した用紙。２つの用紙を代表の生徒が取りまとめて、スケジュールを作成した
＊学校資料を基に編集部で作成

中学では、基礎基本の定着を重視

同校は、併設中学校との接続にも力を入れる。09年度には、中2から高3までの5年間のプログラムの系統性を強化した。併設中学校では、中2への進級段階で、高校でのコースを決定する。どの道を選ぶかによって高校生活は大きく異なるため、保護者対象の説明会や三者面談などで詳しい説明を聞いた上で選んでもらう。

学習面での違いは、Ｔｙｐｅ１コースでは中2から部活動を辞めて勉強一筋の生活となり、Ｔｙｐｅ２コースでは中学段階の内容をしっかり定着させることを重視する。

「高校の学習に付いていけないＴｙｐｅ２の生徒の中には、中学段階の基礎が身に付いていない者が見受けられました。高校で時間を有効に使い、学力を付けさせるためには、中学の基礎の定着は必須でした」（及川先生）

また、Ｔｙｐｅ２には、４分の３程度の外進生がいる。中学での基礎的な内容の定着度には差があり、個別対応が必要とされている。

「高校入学当初、中学段階の基礎的な内容が身に付いていない生徒には基本的な課題を出し、余力のある生徒には発展的な内容のプリントを渡します。『先生は自分のことを見てくれている』という意識が、生徒の学習意欲を引き出すと思うからです」（鈴木先生）

増えた生徒に対する従来の指導の継続が課題

10年春、同校の受験者数は増加し、入学者数は09年度を大幅に上回った。中でもＴｙｐｅ２の入学者は09年度の51人から倍増し１０２人となった。学校全体の実績が着実に上昇したこと、10年度入試で宮城県の公立高校の学区が撤廃され、全県一区になったことが、大きな要因だ。

また、10年春に卒業したＴｙｐｅ２の１期生27人のうち、７人が国公立大に合格し、首都圏の難関私立大にも合格者が出た。中学生や保護者が同校に対して抱くイメージは、かつての「部活動が盛んな女子校」というものからはまるで違うものに変わっている。

課題は、増加した入学者への対応だ。これまでＴｙｐｅ２では、小規模ならではの特徴を生かし、マンツーマンに近い形できめ細かなサポートを徹底してきた。それが、学習にも部活動にも全力で取り組む生徒たちを後押しする大きな力になってきた。しかし、生徒数が増えた今、この個別対応にも見直しが必要である。

「これまでの取り組みの良さを残しつつ、一層の強化を図り、生徒の自主性を伸長していきたいと考えています」（及川先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2005年10月号 ナレッジの継承「部活動顧問の進路面談」など
▶▶▶ http://benesse.jp/berd/ → HOME ＞ 情報誌ライブラリ（高校向け）

埼玉県立
上尾鷹の台高校

小・中学校の「学び直し」

「学び直し」と手厚い不登校支援で生徒の可能性を広げる

◎2008年に埼玉県立上尾沼南高校と埼玉県立上尾東高校が統合再編して開校。校訓は「鷹揚（ようよう）」。オオタカが悠然と大空を舞うように、力強く社会に飛躍してほしいという願いが込められている。単位制を採用し、2、3年次では生徒の個性や進路希望に応じた3つの履修モデル（進学・文系モデル、進学・理系モデル、資格技能取得モデル）を用意。オオタカをモチーフにしたマスコット「ようよう」を製作し、生徒募集に生かすなど、広報活動にも力を入れる。

設立
2008（平成20）年
形態
全日制・単位制／普通科／共学
生徒数
1学年約240人
10年度入試合格実績（現浪計）
2008年4月開校のため、卒業生はいない
住所
〒362-0021　埼玉県上尾市原市2800
電話
048-722-1246
Web Site
http://www.takanodai-h.spec.ed.jp/

変革のステップ

背景
◎開校時から、基礎基本の定着と、不登校経験のある生徒への学習機会の保証に力を入れた学校づくりを行う
STEP 1

実践
◎学校設定科目で小・中学校段階の内容の定着、個別学習支援システムで不登校支援を図る
STEP 2

成果
◎高校志願倍率は順調に推移し、入学生の学力も向上。不登校から普通学級に戻る生徒も出てくる
STEP 3

教師に警戒心を抱き距離を置く生徒たち

埼玉県立上尾鷹の台高校は、さいたま市の北に接する上尾市にある普通科高校で、埼玉県立上尾沼南（しょうなん）高校と埼玉県立上尾東高校を統廃合して、2008年4月に開校した。

同校の特色は、面倒見の良さにある。小・中学校段階の「学び直し」に積極的に取り組み、基礎基本の定着を図ってきた。不登校経験のある生徒も学び続けられるよう、独自の「個別学習支援システム」も整える。小・中学校時代に学校での学びを十分経験できなかった生徒に、基礎学力を付け、学ぶ喜びを感じさせることが、開校当初からの基本方針だ。同校の立ち上げから携わる岡野行男教頭は次のように語る。

「不登校だからといって、必ずしも学習に興味がなかったり、学力が低かったりするわけではありません。学びへの意欲があるにもかかわらず、集団行動への苦手意識から学びの機会を失っている生徒を1人でも救えればと思いました」

09年度に赴任した保健主事の柴田久美子先生は、同校の生徒について次のように語る。

「どの学校の生徒も新任教師には距離を置くものですが、本校の生徒は警戒心が他校生以上に強いと感じました。大人や学校に不信感を抱いた経験があるために、相手がどんな

人か分かるまで心を許さないのでしょう。半面、根は素直でまじめな生徒が多く、仲良くなれば親しみを持って接してきます」

そうした生徒の良さをいかに引き出し、主体的に学校生活を送れるようにするか。それが同校の重要な課題であった。

「コアベーシック」で小・中学校段階の内容を学び直す

基礎基本の定着を図る取り組みの中心は、学校設定科目「コアベーシック」だ。義務教育段階で身に付けるべき学習内容を学び直し、進路実現に向けた土台づくりをする。国語と地歴・公民を「ベーシック人文」、数学と理科を「ベーシック理数」、英語を「ベーシック語学」とし、1年次で週1時間ずつ取り組む。

内容は、国語は平仮名の書き取りから、漢字の読み書きや基礎的な文法、社会は都道府県や県庁所在地の位置、数学は小数や分数の計算、正負の数の加減乗除、英語はアルファベットや基本的な英単語から英文法まで、高校での学びの土台となる基礎的事項だ（P.26図左）。

授業はプリントによる自学自習で進める。いずれの分野もNo.1から順に取り組み、出来た生徒は次のプリントに進む。プリントは1分野につき100枚用意し、順次難しくなる。同一分野内での教科のバランスは、例えば「ベーシック人文」なら、No.1～6が国語、No.7～9が地理No.10から再び国語というように、バランス良く配置している。

生徒はプリントを終えると、進度表に日付を記入し、自分の進み具合を確認する（P.26図右）。一目で進度が分かるようにすることで、生徒同士が見せ合って刺激し合うなど、良い意味での競争意識も芽生えているという。

教師も生徒全員の進度を一覧表に記入しておく。特定の分野だけ進んでいない生徒や、進度が落ちている生徒などを把握し、個々への声掛けに生かす。基本的に自学自習で生徒自身に進めさせるが、生徒の主体性だけに任せるわけではない。

「プリントが難しくなると、どこから調べるのか、何を質問すれば良いのかも分からない生徒が散見されるようになります。放っておけば、手が止まったまま授業が終わってしまうこともあります。生徒の状況を進度表で確認し、添削の合間を見て机間巡視し、『先週はあまり進まなかったから、今日は出来る問題から頑張ろう』『資料のこの部分を調べてみたら』など、声を掛けています」（柴田先生）

個に応じた指導が、生徒の学ぶ意欲を喚起している。

生徒の学力向上に応じた教材のリニューアルが鍵

「コアベーシック」では各クラスに2人の教師が配置され、クラスの生徒を半分ずつ受け持つ。生徒はプリントを1枚終えるごとに担当の教師に提出。教師はその場で添削し、理解できている生徒に対しては次に進むよう指示し、誤答が多い生徒や丁寧に取り組んでいない生徒には、解説後、やり直しをさせる。主幹教諭の浅見晃弘先生は次のように話す。

「生徒が提出してすぐに採点できれば、生

埼玉県立上尾鷹の台高校教頭
岡野行男 Okano Yukio
教職歴31年。同校に赴任して3年目。「生徒には今やれることに全力をぶつけてほしい」

埼玉県立上尾鷹の台高校
浅見晃弘 Asami Akihiro
教職歴22年。同校に赴任して1年目。主幹教諭。「みなで生徒を支えていきたいという先生方の思いを大切にしていきたい」

埼玉県立上尾鷹の台高校
柴田久美子 Shibata Kumiko
教職歴30年。同校に赴任して2年目。保健主事。「生徒の気質や人間関係までを考慮し、バランスのとれた指導を心掛けていきたい」

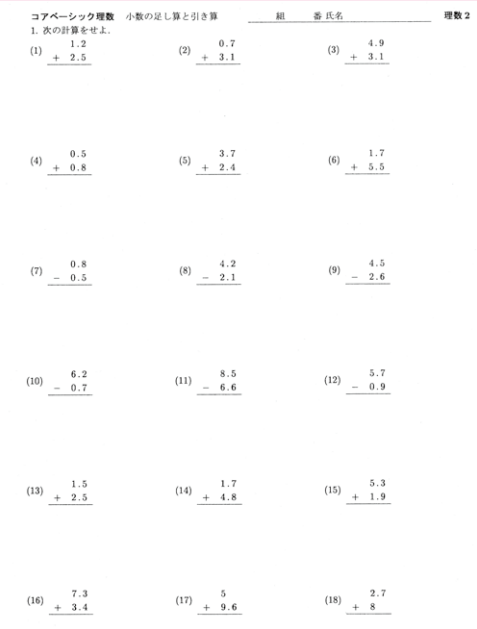
埼玉県立上尾鷹の台高校
久保井啓成 Kuboi Hiroaki
教職歴・赴任歴共に3年目。2年次担任。「生徒の性格や様子をしっかりと把握し、一人ひとりに応じた適切な指導をしていきたい」

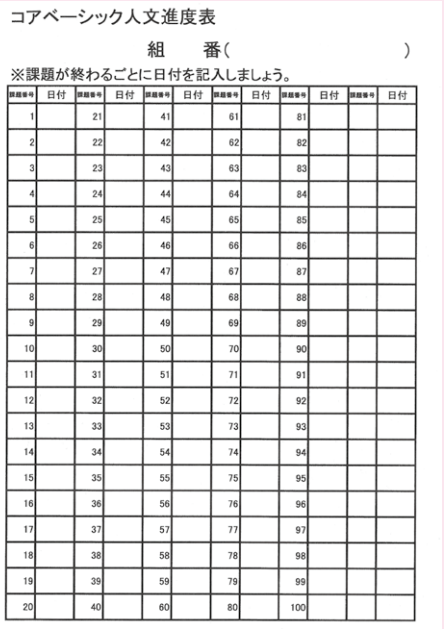
徒は不明点を残さずに先に進めます。そのため、授業中にすべての生徒の添削指導を終えるのが理想です。しかし、生徒によって1時間で3〜4枚進む者や、そもそも理解が追いついていなくて指導が必要な者もいます。実際には、授業ですべての採点を終わらせることは出来ていません。生徒の学力を底上げしながら、いかに教師の負担を減らせるかが、今後の課題です」

プリントの内容も改善が必要だと、2年次担任の久保井啓成先生は話す。

「教材は開校時に当時の教師が作成したプリントを基にしていますが、入学者の学力は年々上がっているため、成績上位の生徒でも意欲的に取り組めるような内容にする必要があります。09年度には、数学と理科のプリントを見直しましたが、年度前に作業する時間がなく、授業と並行しての作業になりました。各教科担当が随時プリントの内容を見直しても良いことになっていますが、限られた時間で、生徒の学力に合わせた教材を用意することには難しさを感じます。少しずつでも改善を行っていくことが目標です」

図 「コアベーシック」で使用するプリントと進度表





コアベーシック人文進度表

組　番（　　）

※課題が終わるごとに日付を記入しましょう。

課題番号	日付	課題番号	日付	課題番号	日付	課題番号	日付	課題番号	日付	課題番号	日付
1		21		41		61		81			
2		22		42		62		82			
3		23		43		63		83			
4		24		44		64		84			
5		25		45		65		85			
6		26		46		66		86			
7		27		47		67		87			
8		28		48		68		88			
9		29		49		69		89			
10		30		50		70		90			
11		31		51		71		91			
12		32		52		72		92			
13		33		53		73		93			
14		34		54		74		94			
15		35		55		75		95			
16		36		56		76		96			
17		37		57		77		97			
18		38		58		78		98			
19		39		59		79		99			
20		40		60		80		100			

図左／「コアベーシック理数」の「小数の足し算と引き算」（100枚中2枚目に当たる）のプリント。問題は1枚につき表裏合わせて36題ある

図右／進度表に該当のプリントが終わったら日付を書き込み、次のプリントに進む　＊学校資料をそのまま掲載

生徒の意欲や態度を評価し学びへの前向きな態度を養う

学校設定科目である以上、「コアベーシック」は成績評価の対象になる。しかし、生徒の学力が、そのまま評価に直結するわけではない。

「私たちが最も重視するのは、学力の高さではなく、取り組む姿勢や意欲です。進度が遅いという理由で評価を低くしたりはしません。出欠や授業態度、到達状況など、日々の授業への取り組み方すべてを見て評価します。取り組みの過程や意欲が重要であることを、生徒に実感してほしいからです」（久保井先生）

「コアベーシック」での評価は、授業前に準備をしているか、私語はしていないか、プリントに積極的に取り組んでいるかなどの点を見る。授業態度などに問題がある生徒には、注意を促すと共に、進度表と一体となった評価表に注意回数を記録しておき、減点の対象とする。

「コアベーシック」に対する生徒の評価は高い。これがあるから志望したという生徒も多い。手厚い指導により生徒の学ぶ意欲を高めるという同校の方針は、浸透しつつあるようだ。

「新課程では、義務教育段階の内容の学び直しを積極的に後押ししています。生徒に基礎基本を定着させた上で、高校生としての学力を付けさせ、更に進路実現につなげてほし

いという思いを教師間で共有する。私たちが足並みをそろえられるかが、取り組みの成功の鍵になると思います」（浅見先生）

不登校者のみの個別学習で転学・退学を防ぐ

取り組みの二つ目の柱は、集団になじめない生徒を支援する「個別学習支援システム」だ。

同校は、埼玉県から指定を受けて支援室の運営に必要な人員を確保し、開校当初から不登校経験のある生徒を積極的に受け入れてきた。

不登校経験のある生徒は、高校入学時に過去にとらわれずに、新たな気持ちで高校生活に臨もうとする。しかし、それでも集団生活になじめず、学校に足が向かなくなる生徒もいる。そうなると、いったんクラスから離れて「個別学習支援室（以下、支援室）」で指導を受けることになる。いわば「登校しながら不登校状態から脱していく」のである。

支援室で支援を受ける生徒は、次のように認定される。不登校状態となった段階で、担任や教育相談員（臨床心理士などの資格を持った非常勤職員）などが、不登校指導を担当する校務分掌である教育相談委員会に報告（委員会メンバーは、岡野教頭、保健主事の柴田先生、保健部教育相談係、年次代表、個別学習支援室担任、教育相談員など）。委員会は、状況を把握して生徒・保護者と面談した上で、支援室利用の可否を判断する。対象は1年次のみで、支援期間は3か月。その間にクラスに戻れない場合は、生徒が延長願いを提出し、再び認定の可否を判断する。

支援室は最大2クラス設置でき、定員は1クラス5人。学校生活は通常のクラスと同じで、担任が朝のSHRを行い、1時間目から6時間目まで各教科の授業を受け、帰りのSHRを行い帰宅する。そして3か月間、支援室で過ごし、通常のクラスに戻れる自信を取り戻した生徒は教室へと帰っていく。

08年度は7人の生徒が支援室を利用し、4人が教室に戻っていった。岡野教頭は次のように評価する。

「認定を受けたものの支援室にすら登校できず退学してしまった生徒、一度クラスに戻ったけれども再び不登校になり支援室で授業を受ける生徒もいます。すべての生徒を不登校から救えるわけではありませんが、支援室があったからこそ進級できた生徒もいます。1人でも生徒を不登校から救えるのであれば、この取り組みの意義は大きいと思います」

大切なのは不登校に陥る前の相談

支援室によって不登校状態の生徒を支援する一方、事前の支援策として、教育相談体制の充実にも取り組む。非常勤ではあるが教育相談員がおり、教職員の係が連絡調整に当たり、生徒はもちろん、保護者からの相談も受け付ける。相談委員会では週1回、配慮が必要な生徒への対応を協議する。それを担任に伝え、一貫した支援態勢がとれるようにする。学校での友人関係、家庭・家族のこと、進路に関することなど、さまざまな悩みが相談されるという。

「支援室の存在は確かに重要ですが、それも生徒・保護者との継続的な面談やアドバイスが出来る相談体制があってこそのものです。学校に行きたくない、つらいという状況が深刻化する前に、『一人で悩まずに相談を』と呼びかけています」（柴田先生）

09年度、保護者からの教育相談は95件に上った。生徒からの相談だけでなく、保護者の話も聞くことが、不登校を防ぐ重要な鍵のようだ。

今年、同校は開校から3年目を迎えた。志願倍率は1・5～2倍と順調に推移し、生徒の学力も年々上がっている。

「今後の課題は、大学に進学できる学力を付けさせると同時に、全員の進路実現を達成することです。多様な生徒への手厚い指導を継続しながら、志望を実現させることは簡単ではないでしょう。しかし、両面のバランスを取りながら、本校に求められる姿を追求していきたいと思います」（岡野教頭）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2009年9月号指導変革の軌跡「千葉県立姉崎高校」など
▶▶▶ http://benesse.jp/berd/ → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）

2年生夏休み後の切り替えと秋からの進路意識の醸成

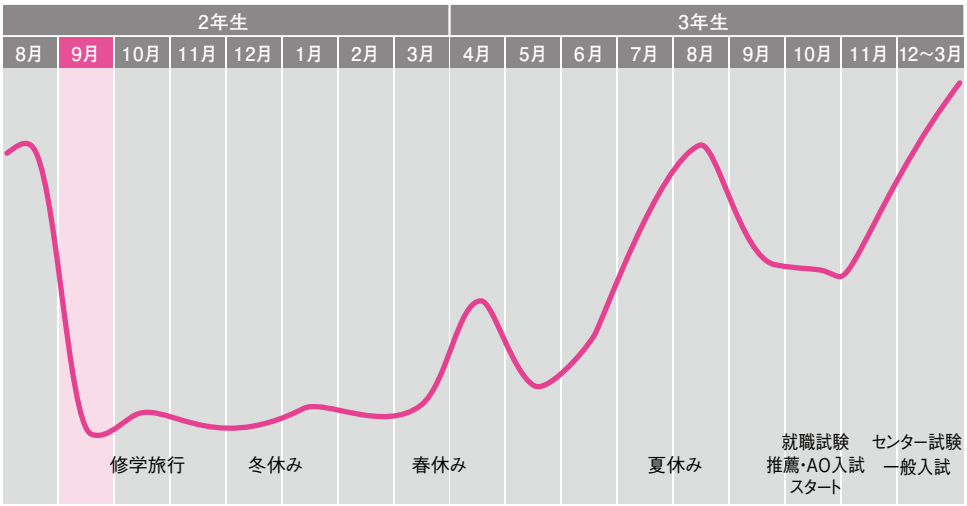
2年生の夏休みの過ごし方によって、成績上位層と下位層の差はさらに広がっていく。また、夏休み後は部活や行事で忙しく、生徒を学習や進路へ意識付けることが難しくなる。巻き返しに必要な学習内容を把握させ、さらに3年生に向けて進路意識を醸成させる指導について考える。

※このコーナーは、高校の先生方との会議を経て制作しています。掲載しているデータなどは、先生方が実際に活用されているものを基にしています。

1 【教師向けデータ活用】生徒の意欲曲線と声かけのひな型を共有

生徒の心の動きに寄り添うために

図1 高2以降の学習意欲の変動を確認する



生徒の状況と声かけを類型化して理解する

図2 7月模試結果を活用した個別の声かけ項目 ダウンロード

期待した通りの結果となった生徒		期待した通りの結果にならなかった生徒	
状況	声かけ例	状況	声かけ例
夏休みに計画通りの学習が出来た	高校の勉強では、学習の成果が成績に表れるのは2、3か月後。夏休み以降の学習の成果は、11月模試で問われるよ。気を抜かずに学習を続けよう。	夏休みに計画通りの学習が出来なかった	まだ十分にばん回可能な時期なので、諦める必要はないよ。これからの1か月で夏休みの遅れを取り戻すつもりで頑張ろう。特に、国・数・英の3教科の中での苦手分野をつぶしてしまおう。
部活動や行事の準備で多忙	行事で多忙なこれからの時期、最低限の予習復習をしておくことが、成績を下降させないポイントだよ。時間が限られているからこそ、絶対に欠かせない学習は何か、模試の結果を参考に見極める力を養うチャンスだよ。	部活動や行事の準備で多忙	部活動（行事）は高校生活でも重要な要素だから、ここぞというときは集中して取り組もう。ただ、勉強する習慣を全くなくしてしまうのは良くない。1日30分でも1時間でも必ず机に向かおう。そうすれば、部活動（行事）が一段落したとき、学習にスムーズに移行できるよ。
志望大が決まっていない	志望校が固まると、目標が明確になって、勉強のやる気も違ってくるよ。志望校が決まって、大きく成績がアップした先輩もたくさんいたからね。この秋、気になる大学をいくつか挙げられるようになろう。	夏休みに計画通りの学習が出来たが、模試結果が振るわなかった	夏休みの頑張りが成果となって表れるのは、これからの模試や校内テストだよ。今回の結果で落ち込むのではなく、自分の弱点を知って、伸ばす材料として使おうね。

ダウンロード このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
http://benesse.jp/berd/ →HOME>情報誌ライブラリ（高校向け）>生徒指導・進路指導ツール集

プラスαの指導

どんなことにも頑張れなかった生徒に注意

夏休み中、部活動にも勉強にも頑張れなかった生徒には特に注意したい。部活動に集中した生徒はその努力が部活動引退後の集中力など、「伸び」につながっていくケースが多い。しかし、熱心に取り組むことがなかった生徒は、夏休みを機に「諦めモード」に転じてしまうことがある。定期テストや模試で大きく成績が下降する生徒は要注意だ。夏休みの様子を把握しつつ、小テストなどのスモールステップで目標を設定し、「頑張る経験」を味わわせておくことが重要だ。

1週間をめどに生活をリセットさせる

長期休暇、そして学園祭（文化祭）や修学旅行などの行事で、生徒は生活のリズムを乱しがちだ。生活・学習習慣を元に戻すためには、普段の生活に戻ってからの1週間が勝負。夏休み明け1週間、また修学旅行明け1週間で、スムーズに元の生活リズムに戻るためには、HRなどで「定期テストに向けて気持ちを切り替えよう」「○週間後には模試があるぞ」といった声かけが重要になる。特に、遅刻や提出物の遅れなど、基本的な約束事が守れない場合は、毅然とした態度で指導していく。

行事を通してクラス集団の力を体感させる

学園祭（文化祭）、体育祭、修学旅行など、2年生の9月から11月は多くの行事が行われる。2年生はその各行事で中心的な役割を果たすことになる。担任としてはそれらに全力投球させることで、「クラスで団結することの素晴らしさ」を体験させることを強く意識したい。目標に向かってクラスで努力し励まし合うことが、予想を超える成果につながるのだという成功体験を積むことで、3年生になったとき「受験は団体戦」という担任の言葉をより実感をもって受けとめられるようになる。

活用後のフォロー

◎図1、図2はいずれも代表例、ひな型である。だからこそ、これらを指導に活用した際の具体的な生徒の反応を次の学年に引き継ぎたい。例えば、「夏休みに思う通りに学習できず、自信を喪失していた生徒に模試の成績を使って声かけをしたら、生徒の行動はこう変わっていった」など具体的な事例を校内に蓄積していく。生徒の意識はその学校の文化でもあるから、基本形を踏まえた上で、3年間の指導ストーリーを学校独自に築くことが大切だ。図1も自校の生徒ではどんな曲線になるのか捉え直し、修正をしていくことが出来れば有意義だ。学校の財産をつくっていくことで、教師の指導力も継承されていく。

データ活用のねらい　生徒個々の心の動きを注視する

生徒の意欲変化をマクロで捉える●2年生の2学期は、しばしば「中だるみ」という言葉で表現される。では、具体的に「中だるみ」とは、どんな状況を指しているのだろうか。確かに「漫然として何もしない」という生徒もいるが、この時期は、行事や部活で忙しく、「多忙で学習に意識が回らない」という生徒も多い。また、教師自身も忙しく日々の活動に追われている。そこで生徒の意欲曲線を示した図1で、教師間で今後の生徒の学習意欲の変動を確認し、先を見通した指導の目線合わせを行いたい。

生徒の状況別の声かけ例を共有する●図2は夏休み前に実施した模試の結果に応じた、面談での声かけ例である。夏休み気分をリセットし、行事や部活動で忙しい中でも学習に意識を向けさせるツールとして活用する。教師間で各生徒のパターンに応じた声かけを共有する意味も大きい。

データ活用の流れ　まず全体像の把握と学年方針の共有を

現実を把握し、方針を決定●図1を使って、生徒の意欲の基本的な動きを学年会などで共有する。多忙から、学習意欲が高まりにくいこの時期、従来の行事をどう利用できるか、学校としてどんな刺激を与えることが出来るかなどを検討する材料としたい。

学年の方針を踏まえて面談を実施●図1で集団指導の目線合わせをした後、図2を使って個別指導に落とし込む。多くの学校で生徒の意識づけに有効に活用できるのは模試や校内テストだ。特に成績票の返却などのタイミングは大切にしたい。受験生の指導経験が豊富な教師が中心となり「夏休みに計画通り学習できず、模試の結果も振るわなかった生徒」など、生徒のパターンを模試結果と状況の2つの軸でとらえ、具体的な声かけの内容を共有する。各担任は、それを個々の面談に生かしていく。

全体的な意欲の経過を踏まえた上で個の指導に向かう

学年会で9月以降の生徒の意欲の変化を共有する（図1）

▼

自校の9月以降の行事を再確認し、生徒へどのような刺激を与えるべきか検討する

▼

自校の生徒像をより鮮明にした上で、声かけが必要なケースを整理する（図2）

▼

夏休み明けから秋にかけての面談で、各担任が生徒に声かけを行う

2 【生徒向けデータ活用】 狭めすぎない進路調査で、進路意識を醸成

大学に目を向けさせる

図3 シミュレーション進路調査票 ダウンロード

●熱烈志望・仮の志望　どちらかに○をつけて志望先を記入しよう

【熱烈志望 or 仮志望】　大学　学部　学科

●進学して学びたい学問、教えてもらいたい教授について書こう

●卒業後はどんな業種・企業に就職する人が多いか、どんな資格が取れるか

●カリキュラム、留学制度など教育内容の特徴を調べよう

●キャンパスの様子（周辺環境など）やサークル活動の状況など、キミが知っているその大学の魅力を書こう

センター試験への意識づけを図る

図4 科目選択サポートシート ダウンロード

第1志望校		大学	学部	学科	専攻など
入試科目（配点）	センター試験				
	個別試験				
第2志望校		大学	学部	学科	専攻など
入試科目（配点）	センター試験				
	個別試験				
第3志望校		大学	学部	学科	専攻など
入試科目（配点）	センター試験				
	個別試験				

センター試験について、下記の項目をチェックしよう

□変更点①
公民に「倫理、政治・経済」という科目が新設される。志望大ではこの新しい科目が課されているか

□変更点②
地理歴史と公民を同じ時間帯で2つまで受験できるようになったため、大学ごとに入試パターンが増える。併願校、第2志望との兼ね合いを検討した志望になっているか

□変更点③
理科が1つの時間帯に統合され2つまでしか受験できなくなった。センター試験と個別学力検査で、理科3科目を課す医学科に要注意!

ダウンロード　このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
http://benesse.jp/berd/　→HOME>情報誌ライブラリ（高校向け）>生徒指導・進路指導ツール集

ウェブサイトからダウンロード！ 生徒指導・進路指導ツール集

Benesse® 教育研究開発センター
http://benesse.jp/berd/
生きたデータの徹底活用　検索　クリック！
HOME→情報誌ライブラリ（高校向け）→
生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください
加工可能な資料がダウンロードできます！

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください！　右のウェブサイトでご覧いただけます。

●2006年9月号
「2年生の夏休み明けの意識付け」
●2008年9月号
「2年生夏休み明けの意識付け」

プラスαの指導

中下位層を励まし、上位層には大志を植えつける

中下位層の生徒の多くは、自分の進路に対して臆病になっている。まずは、受験を前向きに捉えさせるような声かけや工夫が重要だ。「2年生のこの時期なら巻き返しは十分に可能」と、過去の先輩の事例などを交えて説明することも有効だ。また、上位層に対しては、大志を抱き更に上を目指すように働き掛ける。「この分野の勉強がしたいのなら、せっかくだから一番教育が充実しているところで勉強してみないか」など、難関大を目指す意味を伝え、発破をかける。

学問への興味を進路選択の根本に

有名かどうかといった理由で志望校を選んでいると、受験生になった時、最後まで頑張り続けることが難しい。万一志望校を変えた時も、「有名でない大学」に進学する自分を受け入れにくい。小誌「未来をつくる大学の研究室」など、大学の学びの最前線を取り上げた記事を紹介し、「そこで何を学べるか」が進路選択では重要であることを伝え続けたい。将来、志望変更を余儀なくされる時も、「ここなら同じような研究が出来る」と前向きに変更できる素地をつくっておきたい。

文系・理系で指導の方法を変える

生徒に進路について考えさせるとき、文系と理系で切り口が異なることを伝えておく。まず、理系では学部の種類はそれほど多くないが、学科・専攻が多岐にわたる。学べる内容や入試の中身も、学科・専攻ごとに細かく調べる必要がある。一方、文系は学部レベルから種類が豊富だ。名前だけではどんな内容が学べるのか、想像できないものもある。大学案内などでしっかりと学部研究をする必要がある。似たような名前の学部でも大学が異なれば中身も違うことを伝えておきたい。

活用後のフォロー

◎進路調査票は2年生の間は統一したフォーマットにし、保管しておけば、受験生になるまでの自身の成長（志望の高まり）を振り返る材料にもなる。また、2年生で記入した進路調査票は、3学年に引き継ぐことで、受験前の担任の指導にも活用できるはずだ。なお、進路調査票は、コピーして原本を保管した上で、生徒の記名部分を切り取って一冊にまとめ、クラス内で回覧することを事前に伝えておくと良い。同じクラスの仲間が調べた進路情報は、生徒にとって興味深いものとなり、進路選択の視野を広げる材料になる。更に、入試情報の変更に気をつければ、次年度の2年生が活用できる資料にもなる。

データ活用のねらい　いったん視野を広げ、絞り込む

気軽に大学を考えさせる●この時期の生徒は、大学・学部・学科に関する知識が乏しい。志望が固まっていない段階で「ここに行きたい！　という志望校を書きなさい」と迫ると、近隣の大学で安全圏内にあるところを安易に記入したりするケースもある。まず図3を使って「志望が固まっていない人は、どこでもいいから気になる大学のことを書いておいで」と気軽に進路を考えさせることが必要だ。実際、生徒の中には「記入したらずっと第1志望にしなくてはいけないのか」と聞いてくる者もいる。2年生のこの時期、まず大学に関心を持ち、可能性を広げて考えることが重要であると理解させたい。

センター試験の仕組みを知る●一方で、大学入試に対する理解、特に2012年度より科目変更があるセンター試験への理解は確実に高めたい。目の前に迫った科目選択を、生徒に進路を考えさせる機会と捉えたい。

データ活用の流れ　志望の成熟度で指導を変える

気になったポイントを確認する●「シミュレーション進路調査票」（図3）を配布し、記入を促す。面談では、「何が気になってその大学を選んだのか」を聞き、志望の度合いを確認する。また、生徒に「更にこんな大学を調べてみるといいよ」と視野を広げさせるための情報を提供し、進路について考える土台をつくる。

面談で生徒の志望を成熟させる●進路調査票で記入した大学への志望度合いが高い生徒には、図4の科目選択サポートシートを渡してすぐに入試科目・配点を調べさせる。一方で、まだ大学に関する意識が低い生徒には、面談で生徒自身の適性や将来の希望を確認し、図3を叩き台にして教師が補助しながら生徒に徹底的に考えさせ、記入させる。配布前後のタイミングで、入試科目の見方や私立大の方式別入試の考え方など入試の基礎について HR などで説明するとよい。

幅広い視野と入試の現実を知る目を養う

シミュレーション進路調査票（図3）で、気になる大学について調べさせる

▼

志望の度合いの高い生徒には、入試科目（特にセンター試験）について調べさせる（図4）

▼

面談を通して、進路調査票でその大学を記入した理由を確認し、それが進路のこだわりになるか見極める

▼

図4の科目選択サポートシートを利用し、さらに考えさせて記入させる

障がいや病気を持つ人々にとって生きやすい社会の仕組みを追究

立命館大大学院 先端総合学術研究科 生存学研究センター

障がいや老い、病気、また多くの人とは異なる個性を抱えて生きる人々は、社会的マイノリティーとして、生活する中で困難を強いられることがある。そのような境遇にある人が豊かで充実した人生を送るために、社会はどうあるべきか。従来の医学や看護学、社会福祉学などの枠を超えて、より良い社会の実現に向けた研究をするのが「生存学」だ。立命館大大学院の生存学研究センターでは、マイノリティーの人々の立場に立って多様なテーマの研究に取り組み、政策への提言などを行っている。

フローチャートで分かる生存学研究センター

大学院生の主な出身分野

- 社会学
- 社会福祉学
- 看護学
- 哲学
- 倫理学

など

◎生存学研究センターには、100人ほどの大学院生がいる。社会学や社会福祉学、看護学など出身学部は多岐にわたり、障がいを持つ人や、看護・介護の現場で勤務経験のある人も多く在籍する。

研究にかかわる学問分野と研究内容

◎障がいや老い、病気、また多くの人と異なる個性を持つ人がより充実した人生を過ごすために、社会が出来ることは何か。多様な学問分野の視点や手法を用い、テーマを立体的に捉える。例えば、ある障がいを持つ人が生きやすい社会を考える場合、歴史学の見地からは障がいを巡る歴史を、社会福祉学からは支援技術の向上を、法学や政治学からは政策や制度を研究する。

研究成果と社会のかかわり

- 生活環境の整備
- 政策提言
- 企業への提案

など

◎研究成果を出版物やウェブサイトで発信するほか、国や地方自治体に対して制度や政策、法律の改正を求める提言を行う。また、障がいや病気を持つ人と、それを支援する技術を開発する企業との橋渡し役となり、生活環境の整備を進める。

常に社会に対する問題意識を持とう

生存学分野が求める学生像

自分の言葉で考え、発信したいと思う人

常識とされていることに疑問を持てる人

自分の殻に閉じこもらず、広い世界を知りたいと思う人

生存学では、常識を問い直すことから研究が始まります。まずは多数派の意見である常識を疑い、「障老病異」を抱えて生きるマイノリティーの立場から従来の社会の仕組みを考え直すのです。そのため、常に疑問を持ち、それを自分の言葉で考え、表現しようとする姿勢が求められます。言葉の力を信じること、これは私たちのように言葉で社会を変えていこうと志す者にとってはとても大切です。

皆さんも、学校や社会への疑問、また自分と周囲の人との違いなどを感じ、考えたり悩んだりしたことがあるでしょう。実は、研究はそのような身近な疑問や悩みが出発点になることが少なくありません。私自身も、高校時代に社会に対して抱いた疑問を追究することが、現在までの研究の原動力になっています。自分の世界の範囲を決めつけず、「今いる場所より、もっと広い世界があるかもしれない」という気持ちを大切にすることで、新たな疑問を持ち続けることが出来るでしょう。

高校生へのメッセージ　私は高校時代に勉強だけでなく、読書や音楽を通してたくさんのことを学びました。例えば、世の中への不満を歌にしたロック音楽から、社会の矛盾に気づいたこともあります。自分の殻に閉じこもらず、「自分とは違う考えを持つ人がいる」と心を開いておくと、いろいろな場面で予期せぬ学びや気づきを得られると思います。

立岩真也 教授 Tateiwa Shinya

立命館大大学院先端総合学術研究科教授。東京大大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。千葉大文学部、信州大医療短期大学部などを経て、現職。現在、立命館大グローバルCOEプログラム拠点リーダーを務めるほか、障害学会、福祉社会学会、日本生命倫理学会の理事を兼任。著書に『希望について』（青土社）、『良い死』『唯の生』（共に筑摩書房）などがある。

研究を志したきっかけ

高校時代に抱いた社会への疑問が出発点

高校時代に社会に対して抱いた疑問が、私の研究の出発点です。出身地である新潟県の佐渡島には高校が少なく、多様な学力や個性を持つ同級生がいました。そうした環境の中で、誰にでも得意不得意があることに気づき、全員が同じ方向で頑張る必要があるのだろうかと感じました。

例えば、勉強だけを頑張ることが求められる社会では、勉強が「出来る・出来ない」という基準によって「損得」が決まってしまう場合がある。そうなると、出来ない人が損をしてしまうことが多い。しかし、そのような社会は公平と言えるのだろうか――漠然とですが、そうした疑問を抱いたのです。

数学が好きで理系に進むことも考えましたが、社会への関心の方が強く、文系を選択。法学や経済学のようにはっきりとした枠組みがなく、自分の関心に合わせて自由に研究できると感じた社会学を専攻しました。

それ以来、「出来る・出来ない」という考え方が社会にもたらす問題が、私にとって重要な研究テーマとなり、「生存学」という新しい学問分野を立ち上げました。

研究内容

マイノリティーの立場から社会の仕組みを考え直す

「生存学」という言葉は、私が考えた造語です。障がい、老い、病気、性的なアイデンティティーが多くの人と異なるなど、「障老病異」を抱える人たちの「生きやすさ」を追究する学問です。こうした境遇の人々はマイノリティーであることが多いため、学問的に取り上げられることが少なく、社会的に不利な立場に置かれる傾向があります。生存学では、医学や看護学、社会福祉学、法学、政治学、歴史学、哲学など、多様な学問領域を横断しながら、あくまでも当事者の側に立って研究を進めます。従来の学問との違いを、例を挙げて説明しましょう。

耳が聞こえない人に人工内耳を用いて症状の改善を図るのが、医学です。根底には、耳の聞こえない状態は「治すべき」という考え方があり

写真　点字入力用のキーボード（左）で入力した点字は、パソコンで文字や音声として出力される

ます。もちろん、この視点も重要だと思いますが、治らない状態の人はこの枠から外されてしまいます。

一方、生存学では、まず「治すべき」という考えではなく、耳の聞こえない人は「手話を使う人」という認識に立ちます。そして、その人が生活するのが難しいのは、社会の仕組みに問題があるのではないかと考えます。例えば、手話を活用しやすい環境を整えれば、コミュニケーション上の困難はかなり解消されるでしょう。

このように、当事者に原因を帰さず、社会の仕組みを変えることによってさまざまな境遇の人がより生活しやすい方法を追究するのが、生存学です。時間はかかるかもしれませんが、社会の仕組みをより良くするためには不可欠だと考えています。

良かれと思って行われている福祉サービスでも、利用者が不便を感じるケースがあります。しかし、今までは利用者が声を上げる手段があまりありませんでした。そこで私たちは、利用者とサービス提供者との間に立って生活環境の整備を進めています。例えば、OCR[1]の普及によって、目の見えない人の読書は格段に容易になりました。しかし、利用者にしか分からない使いづらさもあります。その情報を技術開発者に伝えて改善を促すのも、私たちの役割です。

生存学では、過去に目を向けることも大切にしています。例えば、現在、人工透析[2]には公費が支給されますが、かつては自己負担でした。お金がなければ人工透析を受けられず、命を落とす危険があったのです。1970年代に多くの患者が改善を求める運動を行い、公費負担制度が実現したという経緯があります。

現在、大学院生がこの運動にかかわる情報を集めて記録しています。今後、財政的な事情から公費負担制度の撤廃案が浮上しないとは言い切れません。その時に運動の記録があれば、どのような狙いで制度が設けられたかを検証し、社会的な意義を考え直す材料となります。人々の言動は、文書化しなければ忘れ去られてしまいます。新たな治療やサービスの布石とするためにも、歴史を記録することは非常に重要なのです。

研究をより実践的なものとするためには、マイノリティーの声を発信し、多くの人に問題意識を持ってもらうことが欠かせません。そこで研究内容を出版物やウェブサイトを通して広く発信しているほか、国や自治体に対して新たな制度や政策、法律などの必要性を提言しています。

近年は、NPO法人と連携してアフリカのエイズ[3]問題に取り組んだり、韓国の障がい者団体と共同でシンポジウムを開催したりと国際ネットワークも広げています。まずはアジアで生存学の実績を作り、世界中に共同研究の輪を広げたいと思います。

研究の今後

アジアを拠点に世界各地に共同研究の輪を拡大

用語解説

❶OCR
光学式文字読取装置（Optical Character Reader）。手書きや印字された文字をスキャナーなどで読み取り、テキストデータを作成する。更に、テキストデータを音声として読み上げるソフトを用いることで、目の見えない人が文章を読むことに活用できる。

❷人工透析
腎臓の代わりに血液をろ過する治療法。糖尿病などによって腎臓の機能が低下すると、尿として排出されるはずの老廃物や余分な水分が体内にたまり、体にさまざまな不調が出て最終的には死に至る。腎臓の機能不全は元に戻らないため、定期的な人工透析、もしくは腎臓移植が必要になる。

❸エイズ
ヒト免疫不全ウイルス Human Immunodeficiency Virus（HIV）に感染することによって引き起こされる症状の総称。HIVに感染すると、体内の免疫機能が低下し、感染症や悪性腫瘍、運動障害などの神経症状が表れる。アフリカ大陸での感染者は、世界の感染者の7割近くを占めている。

大学院生が語る

自分の障がいを起点に障がい者の生活を見直す

植村 要さん
Uemura Kaname
立命館大大学院先端総合学術研究科
先端総合学術専攻一貫制博士課程4年
〈岐阜県立岐阜盲学校卒業〉

Q この分野に進んだきっかけを教えてください

A 私は小学1年生の時、薬の副作用により体内の粘膜に後遺症が残るスティーブンス・ジョンソン症候群という病気にかかり、視力を徐々に失いました。その後、盲学校に入学し、はり師・きゅう師の資格を取得して、高等部卒業後は病院で治療施術を行っていました。

働き始めて十数年が経った頃、病院の在り方を考えるようになりました。病院は病気を治す場所ですが、治らずに亡くなる方もいます。「治す」という視点だけではなく、治らない人をケアする支援も大切ではないか。そうした気持ちから大学の社会福祉学部に入学し、終末期のケアを学び始めました。

学びを進めるにつれ、終末期医療への関心は、自己の投影であると気づきました。視力を回復させたいけれど、今の医学では難しい。自分の状況を病気が治らない状態である終末期に重ね合わせて考えているのではないか、と。それに気づいてから、自分の障がいともっと向き合おうと考え、この研究室に入りました。

Q 現在の研究内容を教えてください

A 病気や障がいの症状を治すというのは、一つの重要な考え方です。しかし、治りにくい、または治らない場合もあります。その時、治らないなりに生活を快適にする方法を研究しています。

例えば、私が視力を取り戻したい理由の一つが、読書が困難なことです。逆に言うと快適に本が読めれば、視力を回復させたい理由が一つなくなります。生活上の困難や不便を取り除くことで、より快適で充実した生活が実現するのです。

具体的な方法としては、書籍の文字情報をスキャナーで読み取り、OCRソフトでテキストデータに直して音声ソフトで読み上げるというものがあります。しかし、OCRは誤認識が多いため、技術者との情報共有などを進めて改善に取り組んでいます。また、もう一歩踏み込み、出版社にテキストデータそのものを提供してもらえれば、更に効率的です。しかし、著作権の問題などを理由に提供を断られることが少なくありません。そこで、出版社側の事情を調査し、問題なくデータを受け取れる仕組みについて研究しています。

もう一つの研究は、スティーブンス・ジョンソン症候群の患者に聞き取り調査をして、症状や困っていることなどを記録するというものです。この病気の発症率は100万人に数人と少なく、医師ですらあまり情報を持ちません。そこで患者の声をまとめて、患者の生活改善などに役立てたいと考えています。

研究室に入るまでは、視力を取り戻したいという気持ちが強くありました。しかし、研究を進めるにつれて、最も重要な問題は「見えるか、見えないか」ではなく、見えなくても困難を感じない社会の仕組みをつくることだと考えるようになりました。これは自分の障がいだけではなく、「障老病異」のすべてに通じる考え方だと思います。

高校生へのメッセージ

一つの価値観にとらわれない柔軟性を

●世の中には、いろいろな価値観があります。高校生の皆さんにとっては、進学や就職などが大きな関心事だと思いますが、時には別の側面から物事を考えることも大切ではないでしょうか。上手くいかない時、辛い時などに、視点を変えて、環境や考え方を変えてみる柔軟性を持つと良いと思います。そのように心掛ければ、自分の可能性を伸ばせる道が見つかりやすくなるのではないでしょうか。

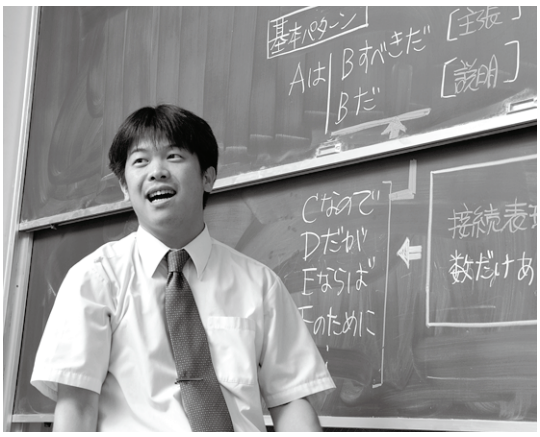
私は、どうしても自分の関心を追求したいと考え、34歳の時に大学に入学して学び直しました。そのままはり師・きゅう師として働き続けた方が良いかもしれないと迷いましたが、思い切って病院を辞めました。その結果、新たに得たものは計り知れません。一人ひとり状況は違うと思いますが、「学びたい」と思った時、いつでも学びに向かえるように、常に問題意識や好奇心を持ち続けてほしいと思います。

30代教師の転んでも起きる！

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める！

「授業で子ども扱いされている」生徒の言葉から自立性に訴える授業に挑む

東京都立八王子東高校 石﨑陽一先生 35歳



いしざき・よういち ◎教職歴12年。同校に赴任して6年目。担当教科は英語。3学年担当。
東京都立八王子東高校 ◎全日制／普通科／共学。10年度入試では、国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、東京外国語大、一橋大などに計88人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、早稲田大などに延べ346人が合格。

私が乗り越えてきたもの

「授業でつまずくと生徒はついてこない」

30歳になる年に、八王子東高校に赴任しました。前任の二校ともいわゆる進路多様校だったため、都内有数の進学校での学習指導には大きな不安がありました。「東京大や一橋大といった難関大への現役合格を目指す生徒に応えられる授業をしなければならない」というプレッシャーを克服しようと、教材と入試問題の研究に打ち込みました。そして得た知識や情報を生徒に過不足なく伝えようとしました。「進学校では授業でつまずくと、生徒はついてこない」。先輩のこの一言がずっと胸に突き刺さっていました。

私は、大学合格が英語学習の目的だと考えたことはありません。それはあくまでも通過点であり、その先に生かせる技能や知識に習熟することが肝心だと考えてきましたが、実際は正反対の授業をしていました。知識として英語を解説する授業スタイルであり、生徒の積極性や自主性を伸ばすことを十分に考慮できていないものでした。

「子ども扱いをされている」授業

授業アンケートを実施した際、回答に「分かりやすいけれど説明が丁寧過ぎ、子ども扱いをされている気がする」という声が多かったのには呆然としました。進度については「ちょうど良い」という声が多く嬉々としたものの、当時の校長からは「『ちょうど良い』とは『遅い』ということ。進学校に求められるのは、3分の2の生徒が『速い』と答える授業だ」と指摘されました。

確かに、英語が苦手な生徒の顔が目の前をよぎり、同じ説明を2回繰り返すことがありました。私は、結果的にすべての生徒に対して無難な授業をしていたのだと思います。周囲の先輩の先生方に相談する中で、自分がまだ進路多様校での指導経験にとらわれており、目の前の生徒と向き合った指導をしていなかったのではないかと思い至りました。

「3分の2の生徒が『速い』と感じる授業」を目指せ

そして、これからも挑み続ける目標

生徒に考えさせる授業を試行

スピード感があり、生徒の積極性や自主性を生かし、卒業後にもつながる技能に習熟させる授業。そんな授業を自信を持って行いたいと考えていた頃、灘高校の木村達哉先生の教師塾を知りました。全国から集まった教師が模擬授業をして講評し合うその塾に、指導力を高めたい一心で参加しました。私の授業は「そのやり方では、生徒は寝る」と酷評されました。

声量と抑揚の不足を指摘されたので、授業を録音して教室後方まで声が届いているかを確認するのに加えて、1分間に話す言葉の数を書き出し、間の取り方を意識しました。

「コンパクトな説明の方が、生徒にインパクトを与えられる」との助言も受け、細かく説明していた単語や文法は事前配布のプリントにまとめ、授業では要点を絞って解説するよう努めました。そうして捻出した時間は暗唱や要約、英作文などに充て、生徒に考えさせる活動を盛り込みました。教師の説明を最小限にすることで、生徒が成長する授業が出来ると思ったのです。

木村先生の教師塾への参加と同時期に、校内の英語科教師の間で、互いに授業を見せ合い、失敗事例も含めた情報交換をする雰囲気がいっそう広まりました。先輩の先生方と日々の授業で抱くさまざまな疑問を共有し、切磋琢磨する環境に身を置くことが出来るのは、私の貴重な財産となっています。

自分の引き出しを増やしていく

赴任6年目の2010年度は、3年生を担当しています。生徒により習熟度が異なるため、進度を全員には合わせられません。授業は成績上位層の生徒に合わせて進行し、理解が十分でない生徒のフォローは、朝や放課後、長期休業中などに個別に行っています。

最近は進度を調整し、卒業後も生かせる英語力を付ける活動や受験対策だけでなく、英語の歴史や英単語の裏にある文化的な背景などを授業に織り込むことが出来るようになり、自分の目指す授業に少しずつ近づいています。

もっとも、授業スタイルは今のままで良いとは考えていません。現状に満足したら、私も授業もそれ以上成長できませんし、生徒の実態に合わせて変えていかなければ、マンネリ化してしまいます。客観的に点検するため、今でも授業は毎回録音し、聞き返します。

素晴らしい授業をする先生は校内・校外に多くいます。しかし、それを私がそのまま取り入れてもうまくいくはずがありません。大切なのは、自分が目の前にいる生徒を指導した時に効果が上がるよう、方法をアレンジすることです。生徒の意欲を高め、学ぶ楽しさを伝える授業をするために、今後も汗を流していきたいと思います。

現状に満足したら、それ以上授業を改善できない

石崎先生の授業実践 Q&A

Q 生徒を能動的に授業に参加させるために、どのような取り組みを行っていますか？

A 毎回の授業冒頭に10分程度、チャンツと呼ばれる音楽に合わせて行う単語学習を取り入れています。事前配布の語いリストを用い、次の順序で進行します。①私に続いて発音練習　②リストの英語を隠し、日本語を見て瞬時に英語が言えるよう声に出して各自練習　③生徒同士ペアで練習　④リストを裏返し、私の言う日本語を、すばやく英語で言う。短時間の練習を重ねることで、単語の意味はもちろん、発音・アクセントにも習熟できると考えます。

Q 生徒に自ら考えさせ、学習効果を高めるために、どのような工夫をしていますか？

A 3年生の授業では500～800語程度の英文を2コマで読みます。説明問題などに仕立てた精読プリントを事前配布し、予習させておきます。1コマ目は、問題ごとに生徒同士が意見を交換。解答方法は口頭だけでなく、生徒に板書させるなど、変化をつけます。最後に私が補足説明を行います。

2コマ目は、その英文を150字の日本語に要約させ、答案をシャッフルし、5項目ほどの採点基準と合わせて配付。生徒は友だちの要約が基準をどれだけ満たしているかを採点します。私は机間巡視し、質問に答えます。他者の答案を添削することで自分の理解が深まり、採点理由を相手に説明することで一人ひとりの持つリーダーシップを発揮させる機会にもなります。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す石崎陽一先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスなどを自由にお寄せください。編集部より、石崎先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

バックナンバーは Benesse 教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。http://benesse.jp/berd/→HOME>情報誌ライブラリ（高校向け）

中高一貫校から見る 中高接続の重要性と課題

― 新課程を契機とした指導の模索 ―

中学校の新学習指導要領では、数学や理科など多くの教科で学習内容が増え、授業時数も1年間で35時間、3年間で105時間増える。新課程の指導を受けてきた生徒を受け入れる高校は、どのような対応が必要なのか。中高一貫校の教師2人に聞いた。

中学校の学習指導要領の改訂ポイント

2012年度に全面実施される中学校の新課程では、選択教科がなくなり（標準授業時数の枠外で開設可能）、「総合的な学習の時間」の時数も減るが、多くの教科では指導内容と授業時数が共に増える。

授業時数が増える教科は、国語、社会、数学、理科、保健体育、外国語で、1～3年生の3年間の合計授業時数は、1教科あたり35～105時間増となる。

現行課程に比べ、各学年とも週当たり1コマ増となる計算だ。

考えられる高校への影響と求められる指導

中学校での学習内容と授業時数の増加により、高校入学段階での学力の底上げが期待される半面、学力の二極化が懸念される。また、選択教科がなくなることにより「興味・関心に応じた学習機会の減少」（＊1）による意欲の低下を指摘する声も多い。

まずは、中学校での学習内容の変化を知り、学びの連続性を意識した学校づくりが求められる。

図1 中学校での新学習指導要領全面実施までの流れ

	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
新学習指導要領実施の動き	先行実施 総則等 数学、理科			全面実施
教科書・補助教材	移行措置用「補助教材」配布	新学習指導要領準拠 教科書検定	新学習指導要領準拠 教科書採択	新学習指導要領準拠 教科書使用開始
小学校との接続		小学校6年生で移行措置を経験した新入生が入学	小学校5年生で移行措置を経験した新入生が入学	小学校で全面実施を1年間経験した新入生が入学
高校との接続		2010年度入試（2010年1～2月実施）について、先行実施の領域は出題範囲に含まれる	2011年度入試（2011年1～2月実施）について、先行実施の領域は出題範囲に含まれる	新学習指導要領に対応した高校入試

＊編集部作成

＊1　全日本中学校長会「新しい時代に求められる学校づくりの調査研究」（2009年3月）によると、36.1％の教師が「興味・関心に応じた学習機会の減少」と捉えている。詳細は、『VIEW21』高校版2010年2月号　特集「新課程を機に現行課程を振り返る」参照
http://benesse.jp/berd/center/open/kou/view21/2010/02/02toku_10.html

インタビュー

中高一貫校における新課程の課題と期待は何か

■公立併設型中高一貫校

新課程は「公教育の使命」を問い直す契機

岡山県立岡山操山中学校・高校
主幹教諭
三浦隆志 Miura Takashi

普通教科増を契機に一層の基礎基本の定着を図る

中学校の新学習指導要領では、周知の通り、外国語や数学、理科を中心に学習内容が増えます。一般の中学校では、学力の底上げが期待される半面、これまで以上に成績上位層と成績下位層の二極化が進む可能性があると、私は考えています。中高一貫校では一般の公立中学・高校よりも生徒の学力差は少ないので、二極化も一般中学・高校よりはそれほど顕著ではないと思います。しかし、学習内容が増えれば、学力の定着が心配される生徒が増えるのではないかと懸念されます。本校教師の間でも学力の定着をいかに図るかという声が聞かれます。

特に公立の中高一貫校では、一般の中学校に比べて、学力定着のために宿題の量が多いようです。本校の中学校でも、岡山操山高校に進学するのに十分な基礎基本やより発展的な学力定着のために、宿題の量は多めです。これから学習内容が増えれば、単純に量の問題だけにせずに、宿題の内容も工夫せざるを得なくなるでしょう。

高校現場に立つ身としては、中学校での学習内容の増加を生かせ

■私立併設型中高一貫校

学校教育に対する信頼感を取り戻す機会に

佐久長聖中学・高校
中学校教頭
岩崎和彦 Iwasaki Kazuhiko

小学校段階からの基礎学力育成に期待

新学習指導要領に対して、いくつか期待している点があります。

一つは、小学校で基礎学力と学習に向かう姿勢を身に付けた生徒が入ってきてくれることです。現行の学習指導要領が施行された頃から、入学してくる生徒の基礎学力と学びに向かう姿勢が気になり始めました。中学受験を突破してきた生徒ではありますが、時に驚く程、基礎的な知識が抜け落ちていることがありました。

また当時は「ゆとり教育」の弊害が叫ばれ、保護者の中には「学校には頼れない」という思いを抱く方も出てきた時期でした。保護者が学校教育を軽く見てしまうと、当然、子どもにも伝わります。「勉強は塾や家庭教師で、学校は友だちと一緒に過ごす場所」という意識が、以前よりも子どもの中に根づいてしまっているように思います。

小学校で授業としっかり向き合ってこなかった子どもが、中学校に入学して急に授業に集中できるようにはなりません。本校においても、生徒が授業を大事にしていないという雰囲気が感じられた

るよう、中高で連携して、教科指導の枠組みを考える必要があると感じています。中学校での学習内容の変更を熟知しなければ、高校に入学した生徒の変化に対応できません。新課程により、中高接続の重要性が一層高まるでしょう。

更に生徒の自立した学びが実現できなければ、学習内容の増加には対応しきれません。中学校段階でいかに学びに向かう姿勢を育めるかが、新課程の狙いを実現する上で大きな鍵になると思います。

選択教科の縮小で学校の特色化を見直す

公立中高一貫校の本校にとって大きな問題になるのは、選択教科の縮小（＊2）です。本校は教育目標の一つに、「主体的に学び、考え、個性や才能を最大限に伸ばす教育の実現」を掲げています。そのため、「レクチャー」「クリエイト」「チャレンジ」という独自の選択教科と学校独自教科の「コミュニケーション」を設け、それが特色の一つにもなっています。

「レクチャー」では、高校の教師が中学の教師とのＴＴ（チーム・ティーチング）により、教科書を離れた内容の授業を行っています。例えば、私の担当教科の社会では、裁判員制度に合わせて模擬裁判を行ったり、選挙演説やマニフェストを作成し、選挙活動を疑似体験したりしました。高校から大学、社会へとつながる高度な内容の一端を紹介することで、中学生の教科への関心と、高校での学びへの期待感を高める効果があります。高校の教師にとっても、中学生から新鮮な刺激が得られると共に、中学生の実態を把握する良い機会になっています。

「クリエイト」では、音楽や体育などの創造的・生産的な内容を選択し、「チャレンジ」では、五教科に関する発展的な内容、補充的な内容に取り組みます。

学校独自教科の「コミュニケーション」は、その名の通り、「聞く・話す・書く」を通じてコミュニケーション能力を育成する教科です。ディベートや弁論の仕方、英語のスピーチ、プレゼンテーション用時期がありました。

本校では、学校の授業が基本であることを、入学前オリエンテーションの段階から生徒に意識づけています。新課程となり授業時数が増えることで、基礎学力が定着し、学校に対する保護者の学習面での期待が高まり、小学校段階から授業で学びに向かう姿勢を培うことが出来れば、中学校・高校において、学校の学習により前向きに取り組める生徒を育てていけるのではないかと考えています。

言語活動の充実を通して人の話を聞く力を身に付ける

新課程でもう一つ期待する点は、考えて表現するという言語活動の充実を重視していることです。きちんと人の話を聞き、自分の考えを述べられる生徒が増えれば、学習の理解も深まり、授業やクラス活動も活発になるでしょう。

私は、現行課程になって、話を聞く力が弱い生徒が増えたと感じていました。例えば、学年集会やＨＲなどで、教師がその場の生徒全員に対して話したことは、基本的に生徒一人ひとりに聞いてほしいと思って話していることです。ところが、7、8年くらい前から、それが自分に向けて話されていると認識しない生徒が増えたように感じます。授業や学活などで教師が話したことを、聞き直しにくる生徒が多くなったと、一時、本校で問題になりました。

これは私の考えですが、塾に通う子どもが増えたことや、小学校でも少人数のグループになって授業を受ける機会が多くなったため、30～35人の集団に対して言われたことが、自分のことであるという認識を持ちにくくなっているのではないでしょうか。

人の話が聞けないということは、授業を受ける態勢が出来ていないことと同じであり、それは学習において大きな障害になります。本校ではこのことを重要な課題と捉え、中学校入試で課す作文の方法を変えました。従来の作文は課題に対して４００字で記述する形でしたが、話が聞ける生徒に

＊2　選択教科は標準授業時数内ではなくなり、設ける場合は枠外での設定となる

ソフトの使い方やホームページ作成だけでなく、日本や世界各国の伝統や文化、社会問題等の学習を通じて、社会で役立つ力の習得を目指しています。

いずれの教科・科目も、個性や才能を伸ばすという本校の教育目標を実現するためには重要な取り組みですが、新課程への移行を契機に見直す必要が出てくるかもしれません。現段階では、6時限目の下に7時限目を設けて対応するなどの方法を検討しています。

新課程が目指す「生きる力」の育成と、本校が養いたいと思っている「社会人としての基礎的な力」の方向性は同じです。新課程を公教育の使命を問い直す機会と捉え、自校が目指す生徒像を再形成していきたいと思います。

公教育では社会を担う人材を育成すべきだと、私は思います。知識だけにとどまらない社会に求められる力の育成を、6年一貫のグランドデザインの見直しでより一層、深化できると考えています。

図2　岡山操山中学校・高校　中高接続の指導の工夫

●中学から高校への接続を円滑に行うための取り組み

- 中高一貫教育推進室による教育活動の支援
- カリキュラム構想委員会を設けて中高で授業研究
- 「集団作り」を意識した特別活動

●基本教科の徹底

高校	・数学、英語、国語の一部で標準・速修の速度別授業 ・数学、英語における少人数指導
中学校	・数学、英語での少人数指導とチーム・ティーチング ・高校の授業見学と学習ガイダンス

●個性や才能を伸ばすための選択教科・科目の開設

高校	・進路希望に応じた科目選択 ・進路希望の実現を目指す多くの学校設定科目（数学概論Σなど）
中学校	・「レクチャー」：国語、社会、数学、理科、英語から選択（中高の教師による協同授業） ・「クリエイト」：国語（書写）、音楽、美術、保健体育、技術・家庭から選択 ・「チャレンジ」：国語、社会、数学、理科、英語から選択 ・「コミュニケーション」：「聞く、話す、書く」などの指導を通じてコミュニケーション能力を育成

＊学校資料を基に編集部で作成

入学してほしいというメッセージを込め、それを日本語の文章を聞いて、要約や解答をする問題に変えました。3、4分程度の放送を流し、その内容について問うことで、聞く態度、聞き取りの力を見るのです。

また、本校では入学すると最低1年間は寮生活を経験させます。自分のことは自分で出来る、自立した人間になるという目的がありますが、それだけではなく「人間関係力」ともいえる力が付くことも特徴です。人に言われたことを理解し、自分が主張すべきことを言わなければ、良好な日常生活は送れません。

新課程からは、子どもの学力や生きる力を高めたいというメッセージが十分に伝わってきます。新課程によってどの程度、子どもの実態が変化するのか。しっかり把握し、指導を見直すと共に、学校教育に対する生徒や保護者の信頼を取り戻すきっかけになることを期待しています。

図3　佐久長聖中学・高校　中高接続の指導の工夫

●中学から高校へつなげるために授業の中で重視していること

①中高の両方を教えた経験のある教師が、先を見通した指導を行う
②教師の話を聞くだけではなく、生徒が自ら考え、発言する授業の実施
③3分前着席で「ものと心の準備」をする
④家庭学習を、授業を効率的にするためのものと位置づける
（「予習→授業→復習」のサイクルを確立させる）
⑤学習内容を削減せずに、基礎基本の定着を徹底する

●中3と高1の接続を重視した指導

高校1年	・高校キャンパスへ移動し、入学進級式を実施。中だるみを防ぐ ・外進生との交流などで、心の切磋琢磨をする力を養う ・生徒の幅広い学力に応じて完全習熟度別授業で伸ばす ・教科書・問題集の反復学習を重視 ・大学進学を視野に入れた指導を実施、新たな目標に向かわせる
中学3年	・1、2年生はクラス替えをせず、3年生でクラス替えを実施。中だるみを防ぎ、新たな仲間とクラス活動に臨ませる ・2学期途中より習熟度別授業導入 ・高校の教育課程に入る ・家庭学習を予習中心にシフト ・中学校での最高学年として自覚と責任を持たせる

＊学校資料を基に編集部で作成

今号の視点

学生が主体的に学び問題解決までを行う体験型授業

従来の講義中心の学習では、学生の主体性や意欲を引き出すには限界があると感じる大学は多い。そうした大学の間で導入が進んでいるのがＰＢＬ（課題解決型授業）だ。学生主体の体験授業によって、学生はどのように自身の成長を感じているのだろうか。

学生の意欲、主体性、課題解決能力を育てる

ＰＢＬ（Project Based Learning＊、課題解決型授業）は、学生が講義・演習で学んだ知識や理論を応用しながら、チームで課題解決に取り組む学習方式だ。能動的な学びを通して学生の意欲が高まる、実地で知識を活用することで知識・技能が定着しやすい、コミュニケーション能力が身に付くといったメリットがあるといわれる。

ＰＢＬの原型は約50年前にカナダの大学で始まり、以後、アメリカやヨーロッパの大学を中心に普及し、日本でも取り入れる大学が増えている。ＰＢＬがどのように学生の成長を促しているのか、二つの大学事例から概観してみたい。

必修の「プロジェクト学習」で「解のない問題」に挑む

公立はこだて未来大「プロジェクト学習～解がない問題への自己組織的アプローチ」

「従来の講義や演習中心の学習形態では、多様化・複雑化した現代社会の諸課題に対応できる力を付けさせることは難しい」

こう話すのは、公立はこだて未来大システム情報科学部の由良文孝准教授だ。

環境、経済、工学、文化などあらゆる問題が複雑に絡み合う現代社会では、誰もが納得する答えを見つけ出すのは難しい。チームによるプロジェクト学習を通して、問題解決能力、コミュニケーション能力、自身の役割を見いだしチームに貢献できる柔軟性を身に付け、「解がない問題」にアプローチする手法を獲得する。それが同大学の「プロジェクト学習」の狙いだ。

プロジェクト学習は３年次の必修科目で（図１）、一つのプロジェクトは教員２～３人、学生10～15人で構成される。各教員が提示するテーマから、学生は自分の興味や専門性に応じて一つを選択。同じチームの学生や教員と共に、課題発見から問題提起、解決までを、１年間かけて取り組む。

２００９年度は22のテーマが用意された。例えば、「地域医療におけるサービス・イノベーション・デザイン」は、15人の学生が選択した。まず、チーム全員の投票によって、全体を統括するプロジェクトリーダーを決める。リーダー

＊Problem Based Learning を指す場合もあるが、本文では Project Based Learning の意味

主導の下、全体を5人1組のグループに分け、グループごとに地域医療についての課題を検討した。

各人が医療問題に関する本を最低1冊は読み、自身の体験などを交えながら話し合う。更に病院を訪れて医師や看護師らに話を聞き、浮き彫りとなった課題を基に、「通院患者の不安解消」「医師と患者間のコミュニケーションの改善」「病気予防と健康管理の促進」の三つの方針を設定。コンピューターを使ったリハビリコンテンツや、ベッドからの転落事故防止装置などの提案につなげた。リハビリコンテンツは、実際に病院に導入され稼働している。情報アーキテクチャ学科4年の宮澤朋子さんは、「期限内に、病院の要望に沿ったシステムを作らなければならないというプレッシャーはありましたが、自分たちの研究が医療現場で活用されたことで大きな達成感を得ることが出来ました」と語る。

図1　公立はこだて未来大・プロジェクト学習の流れ

4学年	自分との対話	専門性を探求する「卒業研究」	更に高度な専門性を身に付ける
3学年	社会との対話	知識と技術を総合し実問題に応用する「プロジェクト学習」	4コースに分かれ、専門的な知識や技術を学ぶ ・情報システムコース└高度ICTコース ・情報デザインコース ・複雑系コース ・知能システムコース
2学年	基礎知識・専門知識の習得	専門分野の知識を学ぶ	
1学年		広く基礎的な知識を学ぶ	「システム情報科学」のプロとなるための基礎と教養を学ぶ

知識を深め、自分を深める濃密なプロセスがデザインされている
＊大学資料を基に編集部で作成

卒業生の9割が「プロジェクト学習に意義を感じる」

プロジェクトは希望選択制であるため、人数が偏った場合は、第2、第3希望のプロジェクトとなる場合もある。大学ではそれも社会体験の一つと捉える。村重淳教授は、「社会に出れば好きな仕事ばかりをしているわけにはいきません。与えられた環境の中で、いかに自分の力を発揮していくかという体験も大切です」と述べる。

実際、在学中は作業分担の公平性に不満を持つ学生もいるが、卒業生へのアンケート調査では、9割が「プロジェクト学習には講義や演習と比べて独自の意義があった」と回答している。また、実際に日常業務や企画、開発においてプロジェクト学習で学んだことが役立ったと回答する者も多い。学習の効果は社会に出た後にも実感されている。

このようなプロジェクト型の授業を導入する大学は多いが、専門科目の履修に忙しい3年次に1年間必修で履修させる大学はかなり少ない。小西修副学長は、「取り組みの意義を理解し、熱心に取り組む学生はここで大きく成長します。プロジェクトを通して、専門以外の分野に興味を広げる学生、自分の弱点に気づき専門科目の履修に生かす学生も多い。視野を広げるチャンスという意識で取り組んでほしい」と期待を寄せる。

宮澤さんは、「プロジェクトを通して、スケジュール管理やチームワークの大切さなどを学びました。今、卒業論文で街の景観について研究しています。自ら街に足を運び、現地の人はどう思っているのか、観光客の目にはどう映っているのかなどを調べています。こうしたフィールドサーベイの手法もプロジェクトから得たものです。卒業後もこの体験を生かして仕事をしていきたいと思います」と話す。

自分で課題を見つけ、深めていく楽しさを知ることが、新たな知的探求につながっているようだ。

ビジネスで必須の視点を体験型学習で涵養

立教大経営学部「ビジネス・リーダーシップ・プログラム（BLP）」

立教大経営学部のBLP（ビジネス・リーダーシップ・プログラム）は、少人数のグループワークを通して段階的にリーダーシップを習得させるプログラムだ（P.44図2）。

リーダーシップというと、強力な権限やカリスマ性でメンバーを引っ張る姿を思い浮かべるかもしれないが、同学部の考えるリーダーシップは、メンバーがそれぞれ自分の持ち味を生かし、チームの成果に貢献することである。誰に対しても自身の主張を提案できる主体性、逆に周囲

の意見を調整してチームの力を引き出す調整力も含めてリーダーシップと捉えている。

経営学部の日向野幹也教授は、「環境変化が激しく、予測困難な今日のビジネスでは、従来の組織のように、上からの指示を待ってから動く手法では通用しません。限定された権限の中で、周囲と協力しながら意思決定につなげる力が求められています」と説明する。

プロジェクトは、企業の協力を得て進められる。企業が自社の戦略にかかわるテーマを大学に提供し、学生が少人数のグループで課題解決の方策を考える。10年度のテーマは「電気自動車を普及させるには」（日産自動車）、「アップルの次期戦略」（アップルジャパン）などだ。

企業が抱える課題を検討・提案し、評価を受けるという過程を通して、学生は専門科目で学んだ知識がどのように実践に生きるのか身を持って体験し、企業から直接評価を得ることで、やりがいや達成感を味わう。そこで得た刺激が、学生を専門の学びに向かわせるという好循環が生まれることを期待している。

事後の振り返りが学生の成長を促す

プロジェクト終了後には、必ず振り返りを行い、メンバーが互いに気づいたことを指摘し合う。自分自身で活動を振り返ったり、メンバーから指摘を受けたりして、自身の強みや弱みに気づかせるのが狙いだ。国際経営学科2年の佐宗純さんは、次のように話す。

「話し合いや振り返りを通して、自分に足りない部分が明確になりました。授業を履修する際は、その部分をどうしたら補えるかを考えながら、カリキュラムを組んでいます。授業への取り組み方も変わり、専門をさらに深められるようになったと思います。大学に入るまでリーダーシップについて深く考えたことはありませんでしたが、メンバーの強みを引き出して、良い方向に導いていくこともリーダーシップの一つだと感じるようになりました」

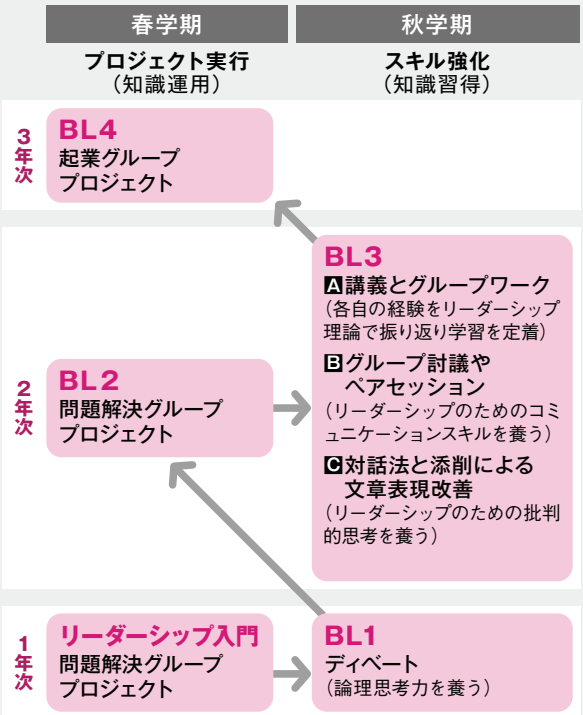
学生は、他のメンバーとコミュニケーションを取りながらプロジェクトを成し遂げることの難しさとやりがいを実感しているようだ。

学生が成長を見せるのは、授業中だけではない。BLPでは1学年上の先輩がSA（スチューデント・アシスタント）として、学生のプロジェクト遂行を支援する。グループ内の議論が煮詰まった時や、発表会に向けた準備など、さまざまな場面で学生はSAに相談する。学生にとって先輩の存在は支えであり刺激にもなるが、SA自身にとっても得るものは大きいという。経営学科4年の松岡洋佑さんは言う。

「後輩といっても、わずか1年しか離れていないので力にそれほど差はありません。後輩の中には私よりも知識の豊富な学生、アイデアを持つ学生もいます。私がSAとして後輩に接する際に気をつけているのは、相手を見くびらないこと、SAを通して私自身が学ぼうとする姿勢を持ち続けることです。私自身の成長につながるのはもちろん、学ぼうとする私の姿そのものが後輩への刺激にもなっていると思います」

学生同士が企業課題に取り組みな

図2 立教大・BLPのカリキュラム



「リーダーシップ入門」は経済学部の学生は全員必修の科目。「BL1・2」は経営学科の学生は全員必修で、国際経営学科は選択科目として履修できる

＊大学資料を基に編集部で作成

学生VOICE

プロジェクトを通して専門科目を学ぶ意欲が高まる

公立はこだて未来大
システム情報科学部
情報アーキテクチャ学科4年
三島 佳
（北海道函館東高校（現北海道函館市立函館高校）卒業）

「地域医療」プロジェクトでリーダーを務めました。グループを作る時、最も留意したのは、学生間の相乗効果です。情報アーキテクチャ学科では2年次から知能システム、情報システム、情報デザインの3コース（＊）に分属しますが、グループを作る際は学生がそれぞれ専門分野の力を発揮できるように心掛けました。また各グループには、学生がバランス良く混ざるように配慮しました。企画を練る際に情報デザインコースの学生が理想の形態を設定し、他コースの学生がそれを実現可能な形にしていくという役割分担が自然に出来、互いの強みを融合させることで専門性も広がりました。これは一人で学んでいたら出来なかったことです。

また、システムを作る時は、使う人の立場になって考えることが大切だと知ったことも大きな収穫でした。作り手の都合が優先していないかを検討する中で、知識や視点が不足していることを痛感することも多く、それが専門科目を学ぶ際の意欲にもつながっています。

調整力を発揮して後輩の力を引き出したい

立教大
経営学部国際経営学科2年
野原衣未
（静岡県・静岡英和女学院高校卒業）

経営学部に入学するまでは、リーダーシップといえば、カリスマ性で周囲をぐいぐい引っ張るタイプを思い描いていました。私は中高時代、友だちの顔色をうかがいながら話すようなタイプだったので、プロジェクトを通して、私にリーダーシップが身に付くのだろうかと不安でした。

しかし、プロジェクトでの議論や振り返りなどの機会を通して、私なりのリーダーシップの発揮の仕方があることを感じました。周囲の様子をうかがう私の性格も、見方を変えれば、周りの意見を聞いてまとめていく力ともいえます。ディスカッション中に黙ってしまった時、「Aさんはどう思う？」と意見を引き出すような調整型のリーダーシップ、それが私の持ち味だと気づいたのです。それからは、自分の考えを自信を持って主張できるようになりました。2年次からはSAにも志願して、後輩の支援に当たっています。プロジェクトで培った調整力を発揮して、後輩たちの潜在力を引き出したいと思っています。

がら、学年を超えて刺激し合い、高め合っている様子がうかがえる。

進路指導に生かす

カリキュラムに体系的に位置づけられているか注目

これまでPBLは、医療、工学、情報など、主に理系分野で技術の習得を目的とした科目に取り入れられることが多かった。しかし現在では、社会科学系の大学・学部にも広がっている。中でも経営学部や商学部などの実学が重視される学部で導入している場合が多い。

宮崎大獣医学科のように新入生に対する導入教育（フレッシュマンセミナー）として実施する例や、同志社大のように教養科目の一つとして、全学部横断で実施している例もある。また、岩手県立大ソフトウェア情報学部では、学生自らが、目的や期待される効果、内容・予算を含めた実施計画を記載した申請書を提出し、認可されたプロジェクトが実施されている。

このような大学に限らず、PBLを導入している大学・学部では、学生の主体性や学習意欲を呼び起こしている例は多い。大学進学後の学びを充実したものにするために、PBLの導入状況も大学・学部選択のポイントの一つになるのではないだろうか。

ただし、こうした体験型学習は特定の科目のみで実施されている場合もあり、必ずしも体系的にカリキュラムに位置づけられているとは限らない。志望校選びでは、カリキュラム全体の中での位置づけや、学習後の学生へのフィードバック、次の学びへの橋渡しがあるかといった点にも注目したい。

以上の点に留意して、大学のホームページ、オープンキャンパスや大学説明会などで確認してみてはいかがだろうか。あるいは実際に教育を受けた卒業生の声、大学が実施している授業評価や卒業生アンケートなど「生の声」を得ることで、より大学の実態に近づけるだろう。

ご意見・ご感想をお寄せください

◎今回の内容に関するご感想やご意見、今後取り上げてほしいテーマなど、編集部にお寄せください。

e-mail:
view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

＊現在は情報システム、情報デザインの2コース

読者のページ

VIEW'S SQUARE

Volume 3

教育最前線からのホットな話題を紹介します

カリキュラム編成で3年間を見つめ直す

小・中学校段階の学力が定着していない中で、新課程への転換期は高校の在り方を見直す機会となる。自校に合わせたカリキュラムをどう作るかは、自校の生徒と教師の3年間をどう見るかであり、自校をどう変えていくかの共同作業にもなる。問われているのは自分たち自身であることを再認識した。［群馬県・明和県央高校・石坂雅志］

変化をチャンスと捉える姿勢が生徒の意欲に影響

新課程は指導改善のチャンスだ。教科・科目、分野など個別に対応してきたものを、限られた時間内で結び合わせながら、身に付けさせるという学校、教師の力量が問われる機会となるだろう。しかし、学校の特色を打ち出すチャンスであり、大学入試や教科の本質を追究し、つなぐチャンスでもある。これをしっかり認識し、教師が頑張り、授業づくりを楽しむ姿が学校にあふれることで、生徒の学ぶ意欲も向上するのではないかと思う。予想以上の相乗効果も期待できるのではないだろうか。［広島県・銀河学院中学・高校・吉岡直人］

タイミングの見極めとバランスに苦心

6月号「指導変革の軌跡」を読み、今の改革のキーワードは「授業改善（授業力向上）」と「個別対応」だと思った。授業改善は従来から言われてきたことで、常に追求すべき不易のことだが、気になるのは、「個別対応」だ。個別対応がかえって生徒の受け身姿勢を促しているのではないか。確かに、生徒とのかかわりは大切だ。しかし、それが「与えられて当然」という意識につながる危険性もある。どこかで「手を離す」必要があり、そこを見通しての「個別対応」であるべきだ。手を掛ける必要はある。しかし、自立とのバランスをどうとるか、大きな悩みでもある。［埼玉県立不動岡高校・久保島昌一］

各校で果たすべき役割を考えるきっかけに

6月号「指導変革の軌跡」で紹介された大分県立日田三隈高校の事例を読んで感じたのは、自校らしさを常に追い求めることの重要性だ。どの学校も地域の進学校の進学実績を追っているとすれば、いつまでも学校は改善しない。生徒が考える自分らしさや将来への思い、それを等身大に捉え、真剣に考えることが進路指導に求められていると思った。［新潟県・匿名希望］

時期に応じた資料が学年の足並みをそろえる

6月号「生きたデータの徹底活用」を読み、ポイントを絞って資料を作る大切さに改めて気づかされた。確かに6、7月頃から、クラス間で指導のばらつきが見られるようになる。本校では2年生でクラス替えをするので、1年生での指導がおろそかになったクラスの生徒が各クラスに混ざってしまう。1年生での指導は2年生からの指導にも影響するため、各クラスの指導の足並みをそろえる工夫が必要だと感じた。［秋田県・匿名希望］

教師川柳

今生徒 明日になれば 師とならん

奈良県・育英西中学・高校・久保貴芳

Benesse教育研究開発センター ウェブサイトを是非ご活用ください

◎情報誌ライブラリ
『VIEW21』小学版・中学版・高校版のバックナンバーが無料でご覧いただけます。

◎調査研究データ
独自の調査・研究データを自由にご覧いただけます。
注目の最新調査も随時アップ中!
「学校外教育活動に関する調査」
「都立専門高校の生徒の学習と進路に関する調査」
「第2回子ども生活実態基本調査」

キーワードや学校名での検索も可能! また、「生きたデータの徹底活用」コーナーでは、便利な指導ツールがダウンロード出来ます。

http://benesse.jp/berd/

編集後記

「理想の授業は生徒によって変わる」――取材させていただいた先生の言葉です。授業は教師だけで完結するものではなく、目の前の生徒を知り、その生徒を伸ばしたいという「思い」で成り立つものなのだと改めて教えていただきました。そして「これでいいんだと思ったら終わり」とも、その先生はお話しされました。ひたむきに「理想の授業」を追求し続ける先生方と共に歩んでいける『VIEW21』でありたいと思います。（佐藤）

VIEW21 9月号 Vol.3　2010年8月25日発行

発行人　新井健一
編集人　原 茂
発行所　(株)ベネッセコーポレーション　Benesse教育研究開発センター
印刷製本　大日本印刷(株)
編集協力　(有)ペンダコ
執筆協力　中丸 満、二宮良太、山口慎治
撮影協力　荒川 潤、川上一生
イラスト協力　山本重也

VIEW21編集部
〒163-1422　東京都新宿区西新宿3-20-2　東京オペラシティタワー22階
電話　03-5371-1238

©Benesse Corporation 2010

VIEW21 2010 October 10月 Volume 4

次号は 10月20日発行（予定）
『VIEW21』高校版は年6回の発行です